断片

二〇一三

u_

（比べてみれば…）

比べてみれば、似ていないものはない。比べられたのだから。比べられさえするなら、それでもう殆ど違いを見出せない。どうにも比べられなくてさえ、その互いに比べられないと言う係わりによって、それらは同じ何かを通じ合わせている。つまり、どれとどれも、どうにもそっくりであるしかない。恐らくは、ただ比べられるための各各を見分ける印だけが違っていて、そうでさえあれば、そこにもう森羅万象は揺るぎない。その印の違いから、どれとどれが似ていないと言っても虚しい。実はその印さえ、全く違わないのかも知れない。違わないどころか、そんな印など初めからなかったようなもので、ただどれかとどれかが比べようとされて慌てて貼り付けられただけで、しかもそっくりな印を、そっくりと分かっていながら、さも違って見える振りをしなければならない羽目に陥ってしまっているだけ。そんな事であれば、何と何であれ比べるのは徒労。と言えるかどうか。そんな事であっても、比べなければならない時には比べなければならない。その時へと何が遣って来たのだろう。直ぐには分

からないにしろ、そこに何かの違いが求められたのは確か。違いを確としたものにしなければ、その先、立ち行かなくなる危うさに身を晒していると気付いて、それが、何かと何かを比べさせるのであるしかない。となれば、そのそっくりであるのなどは取るに足らない。どうにでも、それから目を逸らせる。逸らせないなら逸らせた振りで構わない。そしてその比べたものの違いを見出した振りで構わない。その振りを確としたものにすれば良いのだし、それにはただ、それを確としたものと信じれば足りる。そういう訳で先ずはそこに違いが立ち上がり、それを元に、如何にその違う二つが、見分けも付かない程に似ているかを言い募る事も出来るが、勿論、黙っていて隠す手もあり、それは危うさに晒された身を、どう考えるかで。孰れにしろそれで、違うとそっくりと二枚の札を得たのであり、どちらか一枚だけとは比べものにならない程に広く明るい先行きが開けたに違いない。が、そう比べてしまえば、一枚と二枚はそっくりかも知れない。そうなら目を逸らすだけの事。ただそうして広く明るい方へ踏み出せたとして、と言うより、もう踏み出すしかなくて踏み出していて、そこに何がと見れば、それを見る前とそっくりな、何かがあるしかない。いや、あるしかないとは限らない。ないしかないかも知れない。そのどちらか、どちらでもか、どちらでもないか、のどれかではありそうだ。しかしそのどれも、何とそっくりなのだろう。そのどれもがそっくりなので、森羅万象のどれとど

れも揺るぎなく皆そっくりなのだ。などと、つい思い込めたりもしそうだが、そうであるかどうかなど、まるで分かる筈もなく、その分からなさで見れば、これまた何もかもそっくり。勿論、そう言い募って虚しいだけなら黙るに限る。と言うより、言い募ろうにも誰に向かって。は、やはり、そっくりな誰かに向かって、であるしかなく、であれば、そんなお誂え向きの誰かが居ようと居まいと何の違いもない。そいつが居ると居ないは、そっくりで。で、そんな事なら、行けども行けども違いは常に、そっくりに乗り越えられるばかり、そっくりの札が捲られるための裏面のようなもの。つまりは、そっくり一枚。札であるには裏もなければならないだけの事。いや、どれとどれもがそっくりであるのに、何の裏が要る。持たされているのは裏のない札で、その計り知れなさを耐えられそうになく違いが求められてしまう。そっくりなのに、何かと何かを比べてしまうのは、その裏のないのを、さもあるように違いを色にして絵を描きたいだけ。裏面に見せ掛けられるなら、どんな絵でも良く、描いても描いても、そっくりへ捲られて行く。勿論、そんな絵などないし、そっくりは別に捲られるものでもない。しかしそのない絵を描かずに居られるか。或いは、そんな絵など描かれた事さえなさそうだが、それでもそれは、そっくりの、そのそっくりでない何かではあって、そうして、そっくりにどのようにか係わるしかない。ただそれも、そっくりの裏の話しで、そんな話しなど端から余計だった

のなら、裏のないのもどうでも構わない。ただそっくりだけがあって森羅万象など知らない。さてそれでただそっくりに定まるかと言うと、まるで定まらない。そっくりだけが全てであって何が定まるか。何一つ定まらない、と言うか、何一つが何か、の、何かが何かも分からない。分からない事を言っているに過ぎない。しかし分からない事なら何でも言えて、それはそれで、そっくりと渡り合うには、それなりの得物ではありそう。そうしてただ分からない事を言い続けていれば、その事と事とがどれもそっくりで、そのそっくりがそこにそっくりを映せば、映されたそっくりは、そのそっくりの分からない事ばかりなのに耐えられずに、そっくりから逃げ出すか、逃げられないなら自らを壊すか、するしかない。しかしそうなって何かが定まるか、益益定まらないに違いない。或いはその益益定まらない事が、そっくりからそっくりを食み出させて、そっくりを定めるものの方へ向かわせるかも知れない。全くそうでなかったとしても、そっくりをただそっくりのままから、どのようにか動かしたのだけは確か。しかしそんな確かは全くそっくりとそっくりであるしかなく、そっくりに呑まれて消える。しかしその先にも、分からない事は言い続けられる。そっくりと抜きつ抜かれつするように。そっくりからそっくりが食み出し続ける限り。その食み出させているのが、分からない事を言い続けている事であれば。しかしこの話しの何処が分からない。分からない事など一言も言えていない。分かる

事しか言えず、そのどれもがそっくりであるしかないなら、何が定まらない事もなく、そっくりはそっくりとそっくりであれば、その定まらない事もないままに、何が定まるかの何がも分からず、（二〇一三年一月七日）

（それが何か…）

それが何か、分かるも分からないもない。それは、そこに一つしか見当たらないから。何がそれかがどうであろうと、何がそれかは、はっきり指し示せるなので、何がそれかは全く分かり切っている。一つしかないそれであれば、それが、何かの全てであるしかない。しかしその、それらしいものさえ、全く何処にも見当たらない。しかしそれなら、何であろうと、それと指し示せばそれで、そのようなそれは、そのようなただ一つの何かであるしかない。しかし指し示すとは。予め、指し示せるそれがそこになければ何を指し示せる。何もなく何処でもない方を指し示そうにも、そんな振りを出来るに過ぎない。それがそれを指し示すよう仕向けて、それでそれは指し示される。であってもやはり、それらしいものさえ何処にも見当たらない。そうでなかったとしても、そうであってしまうようなのは何故。その分かるも分からないもない。ただそのよう

であってしまうだけなら。いや、そのようであってしまうのは一つのありようで、もっと他のありようが数限りなくあるのでは。それらは見えているのに見えて来ないだけ。或いは、見えて来たそれらを全て見切って、それらのぐるぐる回る外に、見切れず残った一つを見ている。つまりは数限りなくあるのなど、見えようと見えまいと一つには敵わない。そうしてそれが、その一つしかないそれで、何かの全てであって、何処にも見当たらず、それをそれと指し示すよう仕向けて、ただそれであるしかない。そのように、それがそれである事は、そのようであるによって、何にも依らず繋がらず、ただそれだけでそれであるのであれば、それが何か、分かるも分からないもない。そのようにして、それは一つなのに違いない。その一つであるだけの何か、それをそれと呼ぶ事も要らないのかも知れないもの、そんなそれだが、それでそれがどうしたと。いやどうもしない、とは決して言えない何かが、何か一つの事として、そこにあるのだけは間違いない。その間違いないと言う事、そんな事は、それまで一度もなかった。間違いか間違いないかなど、分かりようがないではないか。が、何故、そんなそれに就いてだけは間違いないのか。恐らくは、その分かり難さが、いやどうもしない、とは言えない何かを、間違いなくしている。間違いなさの分かり難さ故の間違いなさ。しかしそんなものは見掛けだけ。それが一つであるのも見掛けであって、見掛けから目を逸らせば、それは一つでもなければ、

抑もそれでさえない。それと指し示せない何かではありそうでも、そのような何かは、そのような何かであるのから今にも逃げ出さんばかり、取り囲むものに押さえ込まれるかして、やっと動きを封じられている。しかしそれも見掛けと目を逸らせば、自らを自らで引き留めている。その引き留める力さえあれば、指し示せない何かなど要らない。引き留める力は、引き留める何かを弾き飛ばす力でもあるので。その力を見ようとすれば、とはつまり、その力を見掛けへと引き摺り込むなら、それはどのようにも見え、時と共に数限りない姿に見えて行きそう。いや時など何処にもない。時の外で数限りない姿を重ね抜いて、見掛けの外へと出て行ってしまう。後には、その見失われた事しか残らない。しかし見失われた事だけがあるのは、見掛けから解き放たれたのでもあって、何を分かるも分からないもない、しかない。しかしこうなったのは、ただ戯れにか何かを追い掛けてしまったからではないか。それなら戻りたいが何処へ。の何処へも、見掛けから解き放たれ、見失われるままでしかなければ、戻れてもそこは少しも変わっていない所でしかなさそうだが、それで果たして戻れているかなどと自問しようにも、戻ろうとする動きだけは見失うまいと、その動きに身を委ねるばかり。勿論、そんな動きも委ねる身もある筈もなく、戻りたいが何処へ、だけが、どこやらでどうにかなっているだけ。と見切ってしまえば、見切られたのは見切った方で、それがそれを追い掛けていたのでしかないに違

いない。その、でしかない、は何、何もせず時を費やしてしまったか。しかし時など費やすためだけにしかなく、何をするもしないもない。それなら、でしかない、は、であるしかなかった、と言う事になる。であるしかなかった、と言えば、戻りたい所へ戻れているような。何度そう繰り返しても、であるしかなかった、は擦り切れたりせず、戻って戻って戻り果てて果てない。とはつまり、戻り果てるへ行き果ててもいて、もう行くも戻るもない、かと言うとそうでもなく、その行くと戻るだけが、一つになってある。その双方が双方を追い掛けて一つ。しかし全くそれでは、見窄らしい一つ限りの見掛けに決まっている。或いは、その見窄らしさが、その一つであるのを揺るぎなく守っているようなら、その見窄らしささえ消せたなら、行くも戻るもなくなれるか。そうなりたいかは分からないが、そうなったらなったで、そこに、その何の一つも何処にも見当たらない、行くも戻るも数限りない見掛けを遣り過ごして、それが何か、分かるか分からないかはっきりさせなければならない振りの一つも出来て、その見窄らしさに馴染むままに居られるか。それには、ただ費やすためだけでない時が要る。そんな時など何処からも持って来られないが、その要るのが分かったのは何。その何、が分かっていたら、抑もの（文頭の）それが何か、のそれも何も要らなかったに違いない。とは分かるにしても、それが何。などと問わなければならないのは、何かのそれよりも、ただ遅れて来たからだけの

ようでもあるが、費やすためだけの時が何を遅らすもないのは明らかで、それで、費やすためだけでない時も要るに違いない。とは分かるにしても、それが何、と問うまでもない。その何は、それとなって、遅れる事など決してなく、そこに見掛けだけで遣って来ていて、その見掛けによって遅らされる方を、一つ限りに指し示し、(二〇二三年一月十七日)

(ここが行き止まりに…)

ここが行き止まりに見えてしまうのは、初めの一歩をやっと踏み出そうとしていても、それが巧く行っているか見えないからで、それなら行き止まりの他に何がと見て見えて来るこれを、もう見飽きているからか、直ぐにも取り替えたい。であるなら、何と取り替えたいかも分かっていないように、その何かは何処からも出て来ない。形からも匂いからも兆しからも風の震えからも。取り敢えず風の震えを追うと、その震えの数なら幾らでも数えられても冷えるだけで、何処かへ行ける訳ではない。形や匂いや兆しを追っても、やはりその数ばかりが冷たく震えるように積み上がり、却ってそこにあったかも知れないものを遠くへ追い遣っているような。それならきっと、疾っくにそれは出て来ていて、追い遣っていて、

これはもう、これと取り替えられた何かなのでは。するとその証しもないまま、どうにもこれは、取り替えられた何かになるしかない。そうして取り替えたい気も収まると、新たにこれを得てこうして居られるのが、生まれながらの福運のようで、初めの一歩が見失われたままでも、ここが行き止まりにも見えなくなり、その一歩にそっと何かが触れて来るのも知れた。その感触にじっと目を凝らせば、それは全くどうにも出来ない行き止まりのここで、その中に、これと取り替えなければならないものが埋まっているのも透けている。幅も奥行きもたっぷりで、とても掘り出せる代物でないのが分かれば直ぐに、これもまた、それとそっくりな、幅も奥行きもたっぷりで動かしようもなさそうと分かる。しかしどちらもがそんなものなら鏡を裏返す要領で、何一つ動かさないまま、二つは綺麗に入れ替えられる。ただそれで、これをこれと取り替えたいものと取り替えられたか。抑も鏡を裏返す要領など知らない。知らなくても入れ替わってしまったかも知れないなら、もう入れ替わってしまったに違いない。そうなってもまだ、これをこれと取り替えたいものと取り替えたいか。それが、ここが行き止まりであるかのように分からない。その分からないので、ここが行き止まりであるしかないようなら、その分かってしまってここが行き止まりでなくなるのは、行き止まりの他に何がと見て見えて来るこれを失う事でもあって、これを失いたくないなら分からないままにして置くしかない。それで取り

替えたい話しが終わるとして、これは、どうにかなったか。取り替えたいに替わる何かが求められないなら、それはそれで、これを失う事にならないか。ただこれであるだけではならないこれであるしかなさそうなら。しかし取り替えたい話しが終わっていては、取り替えたいと何かを取り替えたい話しも、終わっているしかない。そんなこれなのだが、何故そんなこれなのか。もう、そう考えさせるだけのこれの他に、これはない。と、決め付けられる訳でもないこれしか、これと指し示すのは難しそう。或いはそれはもう、指し示しようもないこれかも知れず、そんなこれに取り縋るしかない不運を嘆くべきかも知れないが、ここが行き止まりでは、ただ行き止まりである他は、嘆くも笑うも違わない余計な振る舞いに違いない。そんなこれであっての、初めの一歩をやっと巧く導けたようでもあるなら、それは行き止まりの最後の一歩にもなって、つまりは初めからそれは一歩でもなかった。ここに、ただ止まったまま踏ん張っただけのような事。であるならもう、行き止まりであるのを気にするまでもなく、それならもう、行き止まりは行き止まりでもなく、敢えて言えば、何時からか知れず行きながら止まっているような事かも知れないが、気にする程の事でもなければ、言う程の事でもなく、つまりは、ここなど初めから何処でも良いような何処でもないような。と言ってしかし、通り過ぎられるのでもないのは、もう後ろを振り返られないから。振り返られる後ろは狭くなるばかりでは

ないか、それなら孰れ後ろは跡形なく消えると気付いた時から、行きながら留まっているようなここは、そのようなまま見えていて、取り縋るしかないこれは、そのように見えて来るここに抗いたい、或いはここを打ち消したい、それを叶えるための一瞬だけなら掠め取れる、ここがここでなくなる音でも匂いでもないものの感触で、その一瞬であるばかりに却って止め処なく引き延ばされてしまうのをどうにも出来なくて、そのようなこれであるばかり。しかしどう目を凝らしても、そんな感触には行き当たらず、音でも匂いでもないものがどう音でも匂いでもないのかの覚えもなく、ただ掠め取れたには違いない虚ろな音でも匂いでもないものだけが、終わらない一瞬をそっと撫でている。であるなら、それが取り替えたいものであったかは知らないが、その行方知れずの音でも匂いでもないものに触れようとするこれは、その音でも匂いでもないものが触れて撫でるものへと取り替えられたのではないか。終わらないなら、それは一瞬ではなく、一瞬を一瞬に打ち消すもので、それに触れて何がどうなるかは、ここに一点の曇りなく有りのままに明らかで、それは明らか過ぎて、その始めにも戻れず、終わらない終わりにも行き着けない。しかし、であるならそのままに、それを取り替えたくはない。しかしどうなのだろう。それもまた取り替えずには置かれなくはないか。それならそれはもう何でも良い。とはつまり、どうあろうと、それは有るべきもので有るしかない、そんなものに違いな

い。そうは言っても、それは何の事、有りもしないのかも。有るべきものでは有り得ないので、それもこれもどれも、有り得ない有るべきものの動きとして現れて、有り得るのでしかない。少なくとも、そのようなものだけが、見る事の出来るものだった筈。それともそうでもなかったか。見えていたのに気付かなかった、或いは気付いていたのに見えない事にされていただけ。ただ、そんな詮索など有るべきものの前では何でもない。何故ならもう何でも良く、それはつまり、何でも良くない、と取り替えられずには置かれない。取り替えたところで何も違わないが。いや、良いと良くないが取り替えられる度に、大違いが隔たり裂けて、前の良いと次の良いも全く違う良いで、良くないも、どの良くないとも比べようもなく一々隔たって、それならもう取り替えているのでもなく、（二〇二三年一月二十三日）

（閉じると開くを…）

閉じると開くを行き来する他、どうにもならなかったのなら、それは誤っていたのか。そうでなくなって、それで誤りが正されたか。放って置かれた誤りに、留めが刺されただけなのでは。それまでを誤りなりに持ち堪えたのは、そ

うする他なかったのなら、それで正しかったのでは。ともあれ、行き来する路が途切れたのだけは確か。そして、閉じると開くの間に身を置けるのでもないので、閉じていたものと開いていたものは、全く行方知れずになってもいなければ、二つであるなりにも、どのようにか一つになっていなければ収まらない筈。とは例えば、閉じていたものは、閉じているままに開こうとされ、開いていたものは、開いているままに閉ざそうとされる、と言ったような。で、仮にここが開いている方なら、閉じていたものは開こうとされ、それでもう開いているらしい。何故なら、開こうとされるようにそれは閉じていて、そのように閉じていた事がそのまま、その開かれる事で、その他に開かれようもないので。しかし、仮にここが開いている方なら、と言うのは何。いや何であってもそうであるならそれで構わないが、であるなら、そうであるために、閉じているものを背負っていなければならない、とそんな事もなければならないのではないか。その背負うままの閉じているままのものとなると、そのままに開こうともされないし、どのようにか開かれもしそうにない。それを開こうにも、その何処がどう閉じているかさえ突き止めようはない。突き止められたようでも、その何処までもがどうにも閉じていると分かるだけで、突き止めようの向きが見当違い。しかしその閉じているとは何。開いてはいないし、開こうともされようがないので、それならそれは閉じていると決め付けるしかないようなもの、

決め付けなければ少しも閉じていないようでもある。その閉じていないような
ので開こうともされないなら、辻褄は合う。そのようにして、それは閉じてい
る。そうであるより仕様もなく。さて、それに対して出来る事と言えば、一度
それから目を逸らし、つまり背負うままであるのを忘れ、決め付けられたもの
があるなら洗い流し、それを、ただ閉じていたものとして改めて見て取る事だ
が、そう都合良く事が運ぶ筈もなければ、閉じると開くは、全く手に負えない
代物となって放り出されるしかないが、それで晴れて二つはどのようにか一つに
なった、と言えるかどうかは知らない。この閉じたり開いたりから抜け出せ
たようではある。尤も、ようではあるところで、何が変わったとも知れないし、
抑も変わらなければならないか。それなら抜け出せたようであるのは何の事で
もなく、何の事でもないまま、どのようにか閉じたり開いたりするしかなく、
それに行き来を繰り返すしかない。いや行き来を繰り返すとは、ただ喩えに見
せ掛けた尤もらしい言い回しで、実際に何がされているのでもないなら、閉じ
たり開いたりへと、どう係われていられるのかも怪しい。閉じるも開くもない
のかも知れない。と、言うだけなら言えるが、閉じると開くは、ある。それが
なければ、初めから何もない程に。しかしそれが何。そんなものなら、それと
の係わりが、どうであろうと、どのようにかであるだけで、どうと言う事もなさ
そうな。いや逆に、そんな突き放すような身構えをしては、却って閉じると開

くに、進んで絡め取られ、運がなければ息の根を止められるようなもの。であっては、尤もらしい言い回しでしかなくても、その行き来を繰り返すに戻るしかない。その行き来の路の途切れたのなど別の事にでもして。いやその別であろうとなかろうと、もう、そうは戻れない閉じると開くに、身を据えるしかなさそうで。そうして行き来を差し止められては、ただ閉じると開くに窮まるだけに、防ぐ術も備える術もなく身を晒すのみか。或いはこの身は既に、閉じると開くに窮まったその姿であるなら、何を防ぐも備えるもない。その姿を彷徨うも突き抜けるも守るも捨てるも同じ。しかしこれでは、どうにも全てが開かれていないか。或いは開くままに閉じていると言えなくもないが、そう言えてしまうのも、ただ開かれているからで。そうなら、その開くままに、どうにも全てが閉じているにしても、ただそうであるだけのように。これまた、そう窮まっているなら辻褄は合う訳で、そのようにしてこの身も窮まっている。ただそうであったところで、初めからそうでしかない所へ行って来て戻ってを繰り返しているだけなのでは。いや、そんな所が何処にある。あるなら途切れる路もない筈。その途切れてしまって、初めからを容易く振り返られる筈もない。或いはだからこそ、ここを、初めからそうでしかない所と見出せるなら、その初めからは、振り返られた所にはなく、路の途切れた後のここから始まる初めからに違いない。しかしそれで果たして初めからか。いや、見出されさえする

なら、見出された通りであるまでの事。それがそうであるかないかなど知りようはない。その見出された通りが何処にも見当たらない。そう見出され直せば、どうにも全ては閉じていないか。もう開くも閉じるもないかのように。開くと閉じるを行き来する路の途切れるのが、ただ閉じるだけの事であるなら何とも分かり易いが、そうであるままに開かれてしまうのも明らかで、身の据え所の何処にも見出しようはない。とはつまり、その見出そうとする身がない訳で、その姿を失う事が、開くと閉じるの行き来する路の途切れる事だったのでは。いや、その身の姿こそ、失われたままに見出された通りに見出されていて、ただじっと、開くと閉じるを行き来している。しかしそれでは何もしないも同じ。或いは何もしないために、そうしている。しかし、失われたままの姿で何もしないなら、それは、何のためにも何もしなくて構わないからで、これより正しい事もなさそうな。但し、それが正しければだが。と言うか、正しさなど要るのか。或いは、要るものだけが正しいなら恐らく正しいものなどない。見出される通りの他に、要るものもなければ。そうして誤りだけなら、その放って置かれたのは、（二〇一三年一月二十九日）

（待たなければならない筈の…）

待たなければならない筈のものが来ないので、替わりに数え切れない大小の十字を胸に溜めて何とかじっとして居る。十字と言うと硬くて重そうだが元は息で、その吸い方で、それが十字の形のまま胸の奥に詰まって行く。その重い胸を抱え、益益小さくなるしかない息を吐く度に、息は、影のような色を斑に乗せて切れ切れに散って、それぞれに十字の形にカタカタと転がる。どれもどう見てもゴミ。その吹き溜まりの音を、囁き掛ける声のように聞いて耳を澄ますと、十字が何の働きをするかが繰り返し語られる。それは溢れるゴミの効用と同じにしか聞こえないが、多分聴き方が悪いのであって、先ずはゴミについての思い込みを捨てるべきで、するとゴミはもう、不要になった厄介物ではなく、何かと何かが交わって出来た、どれも、二つとない珍しい何ものかで、そのの交わる組み合わせも数知れない。成る程それでは、役に立たない組み合わせが殆どで、丸ごと厄介なゴミと見做されるのも仕方ないのかも知れない。しかしそう見做されるものが山となってこそ、そのぶつかり合う音は、その効用を語れて、役に立ちそうな組み合わせの立てる音の方が寧ろ雑音で、何処かへ掻き消される。しかし実際は、どれも何の役にも立たないのかも知れず、それよりどれ一つ取っても二つとないのが肝要で、必ず十字である事によってそうなのであり、十字が欠けたりすれば、その形は見る見る崩れてただの塵になり、

吹き溜まりの下の泥に埋もれるしかない。それでさてその十字の働きは、殆ど一言で語られる。つまり、十字の働きによって、形あるものはどれも十字で出来ている、と言う事。そして必ずしもそれは満遍なく働くのでなく、どうやらその集まっている所と疎らな所があり、重い胸から吐かれた息の十字になって溜まった所は、激しく十字の働く所でありそうな。つまり、そこでの十字の働きが、そこから遠く離れたものも、形ある十字のものにしているような。形あるものだけではない。泥に埋もれた塵の一つ一つにも十字の働きは及んでいて、目に見えない十字は、それらの内の奥へ、剥がれ難く食い込んでいるに違いない。何故なら、胸の奥に溜まった数え切れない十字なども、紛れもなくそうしたものであるしかないので。しかしそんな目に見えない十字なら、ずっと背負わされて来た筈のものではなかったか。その逃れようのない重みが、宙をも飛び越えさせ、先を急がせていたのではなかったか。それが何時の間にか胸に溜まってしまっていたとは。或いは、十字の吹き溜まりなどは見せ掛けで、実はそこは、十字が欠けて崩れたものばかりなのに、それをそのままに見ては、じっとして居られなくなるだけで、胸の重みにしても十字の溜まったせいでなく、背負わされたものを失った替わりの重みでしかないのでは。つまりは、待たなければならない筈のものが来なくても、来る兆しすらなくても待ち続け、ずっとそこに自らを足止めするための十字なのでは。それならそれは見せ掛けどこ

ろか、まやかしの十字であって、十字でなくても、錘を繋いだ鎖で構わない。とは言ってもそんな鎖など何処から持って来られよう、やはり妨げとなり得るのは、何処からかどのようにか交わるらしい十字ばかり。それなら、まやかしも何もない。胸の中が空っぽで、ゴミ溜めに向かって息を吐いているだけにしても、ただ十字だけが立ち塞がっている。それはきっと、待たなければならない筈のものの事は分からなくても、それを待たなくても、形ある十字の犇めく中へ何時か身を投げ込むべく先を目指していた、そのせいであるに違いない。中が空っぽでも、胸の形は十字であると思い定めてもいたからかも知れない。いやそんな勝手な見込みこそが、まやかしであって、空っぽの胸も息も、疾っくにゴミ溜めの中に放り込まれているのでは。寧ろそうであるのが良い、そうであれば、待たなければならない筈のものとは、待つだけ虚しい十字であって、それは遂に待った甲斐あって、まやかしの十字となって見えないままに、ここに窮められているだろうから。さてそれで、その十字は何をする。何をしようにも、その十字しかなければ何をしようもない。しかし何と何が交われば、そんな十字になるか。と考えれば、全くそうでないかも知れないが、経緯からすれば、背負わされて来た筈の十字と、待たなければならない筈のものであった十字とが交わった、としか考えようがない。確かに十字と十字が交わるのでは、何とも見え難い、それをまやかしとも決め付けたくなる。それならその十字が

何の働きをしたかは明らか、この十字を巡る動きを終わらせたのだ。いや一体何が終わっているか。この窮まった十字は、これまでの十字を巡る動きを離れ、恐ろしくも何を仕出来すか知れない。とは言っても、その十字しかなければ、それを恐れなければならないのは、その十字だけに違いないが。いや、その十字しかないと知っているのは誰。その胸の中も吐く息も、その息の吐き付けられる所も、ただ十字であるのを見なければならない誰か。或いは、そんな誰かは居なくても、それに替わる十字が、何を仕出来すか知れない恐ろしい十字と向き合っていなければならない。十字を巡る動きは終わっていない。十字ばかりでは、もう終わらせようもない。それを丸ごと、形ある十字の犇めく中へ投げ込めたら。そう出来たらきっと、形のありながら形のなくもある十字が、あるとないの境を超えて、あるもないも知れなくなる。そうしたくてそれを目指して来たのなら、待たなければならないままに、十字はまだ窮まってなどいなくて、嫌でも胸の中には、数え切れない大小の十字を溜め込むしかなく、その吐く息を十字に転がすしかない。しかし今更どうしてそんな事が出来る。十字と十字の交わる十字に息も止められ、その十字はただ立ち塞がって、そのあるもないも知らず、ただそれだけで転げ回るばかり。いや、その十字しかないと知っているのは誰。の誰に十字が替わろうと、

（二〇一三年二月五日）

（倒れそうで倒れない…）

　倒れそうで倒れない歩き方は、目を覚ましたからにはじっとしていられない屍を真似ている。態と大きく蹌踉けたりするのは、そこに何も遮るもののないのを楽しむようだが、それは切羽詰まっているのを隠すためで、急ぎ食い物を見付けなければ、その屍としても立ち行かない。勿論、屍は歩いたりしないし、ものを食うのに一刻を争ったりもしない。そう分かるのは、そいつ自らが屍だからで、そう分かっているので、その歩き方を已めないだけで食い物を探し回れていられる。食い物など見付からないし、見付かっても使い途はない。そう思えるので、屍は、屍らしくもなく、屍を真似られる。本気でものに食らい付く積もりなら、その思いに雁字搦めで身動きが取れず、屍であるのを呪いたくもなるのではないか。そんなものが斜めに流れるように映るのを眺めても、何の腹の足しになるでもないが、直ぐにも食い物に有り付かなければならない身としては、幾らか慰めにもなるらしい。と、そうでも考えておけば、それを流れるままに放っても置ける。しかし食い物とは何故。もっと他の、例えば、抜け道とか、秘密の糸とか、身を隠せる物陰、目を眩ませてくれる光り、或いはこの身をここから綺麗さっぱり消し去ってくれる何か、そんなものの方が、ず

っと切羽詰まって入り用であっても良いのでは。それとも、それらは全てもう揃っていて、その役目も果たし、その上でやはり食い物だけが欠けているのをどうにかしなければならないなら、食い物とは余程のもので、しかしそう余程のものである程、余程手に入り難い訳で、その手に入り難さだけが、それを余程のものとして手に入れないでは済まなくさせているのかも知れない。成る程この考えも、歩く屍に劣らず慰めにはなりそうだ。そうして慰めばかりを集める程に虚しい事もなかろうし、そうする程に、流れるように狭い所に押し詰められても行くようで、食い物はその狭い所を食い破るためにも、是非にもなくてはならなくなるようだ。と言って食い破れば良いだけでなく、やはり腹の足しになるのは欠かせない。それは、押し詰められる狭い所と空いた腹とが、などのようにか一繋がりだからで、それはどのようか、屍が屍を真似なければならないのに通じるに違いない。そうでなければないだけだが、ないで済まないなら、そうでなければならない筈だ。そうしてまた屍を映す流れを眺めると、屍は何もしていない。それは、ずっと探していた食い物として、態と見付け易いように自らを横たえたかの姿で、食らい付かれるのを待っているよう。それは、屍は食い物かどうかの問い掛けにも見える。食われて行く屍とは何。屍にとって死とは何。答えがあるとして、それは誰のためのもの。その問いを受け流して屍を呑み込んで、空きっ腹は満たされるか。遣ってみなければ分からないなら、

遣ってみる値打ちは、ない。屍は何もしていないなら、それは、食い物の事は片付いたのだ。それならその屍を真似て、屍を真似る屍のように、態と蹌踉けたりしながら歩いてみるのも楽しそう。すると倒れそうで倒れないどころか、跳ねるように舞い踊るしかないが、踊り続ける程に何とそこは狭いのだろう。直に気付くのは、実は狭い中で踊っていたのではなく、その狭さが、憑かれたように飛び跳ねていると言う事だ。しかも狭さは一つでなく、どれも一様でなく、長いもの短いもの高いもの低いもの様々な狭さが入り組んで、互いを打ち消し合うように跳ねている。しかしそう分かってしまえば、入り組むどころか、ばらけて別れ別れになって、それはもう狭さも広さもなく、つまらなそうに、それぞれがそのままの己の姿を写しては、取り敢えずは消え去るのを免れていると見える。そのように見える様こそが、踊る事も出来ない、愈愈行き場を塞がれた狭さなら、確かに食い破りようもない。そこでまた、屍を真似る屍を真似ると、しかしまたも跳ねるように舞い踊るしかない。何が踊るのかと見ると、それは、それを見ようとする己の姿が己の姿を見てそれを写し取って行く己の姿であるしかなさそうで、目を背けると、食うものと食われるものが互いを食って食われている様を、屍を真似る屍同士で演じているのが、斜めに流れるように映る。狭さがそれを眺めていた。それは入り組むのか、ばらけているのか、何をしてそこに狭さとして居られるのか、何も分からない狭さで、その狭さが

狭さを眺めれば、そこでは屍は、ただ踊り続けるしかないもので、踊り続けなければならないばかりに屍であり続けなければならないもののようで、それはそれで何の不足もないようなその姿には、ただ食い物だけが欠けているに違いない。屍はそれを知らないだろう。狭さが、それを教えないから。狭さは決して狭さの中に食い物を入れない。それで屍の踊りは、食い物を探し回っているように見えてしまう訳で、そんなものが見付かる筈もない。であるなら、屍の踊りは、屍が踊るのでなく、決して食い物を入れない狭さによって踊られている。それは狭さと食い物との互いへの問い掛けにも見えて、その互いの問いを隔てたままに問わせないのが死であるなら、それが、屍にとって死とは何か、の答えでもありそうだが、それが屍のための答えである筈もなく、誰のための答えか分からないままに。それで狭さは、自ら狭さの行き場を塞いで、ただ狭さでしかない狭さを得ただろうか。寧ろそれで狭さは、屍を見捨てた死へと切り開かれて行き、何処までも、食い物への解けない問いを相手に踊り続けるしかないのではないか。或いはそれが狭さの求めたものなら、屍がどう思うかは兎も角、屍が踊りに付き合つた甲斐もあつたと言うもの。それでもう屍の真似をするような真似はしなくて済みそうで、ただ屍のままに、食い物は忘れて、何処へでも蹌踉けながら歩いて行けるに違いない。しかしそんな屍を真似る屍も、何処からか現れないとも限らないのは、狭さが、その何処からへと切り開

かれた切りだからで、（二〇一三年二月七日）

（何処へ行くにも道は…）

何処へ行くにも道は狭い方が良い。何処へも行けない程に狭いなら、道として全く揺るぎない。道にとっては間違いなくそうなのだが、そこを通らなければならない身には、その道の揺るぎなさは果たしてどうか。勿論、何処へ行きたいか、何処へ行かなければならないか、何処へ行くしかないか、にもよるし、その道が何処へ通じているか、いないか、にもよる。狭過ぎて何処へも行けないなら、これより何処へも行かずに済むと、ほっと息を吐く。或いは、急いで別の道を取る。孰れにしろ道は一本でなく、僅かに道を逸れるだけで、知らない別の道の入り組んで、果てもないのに目は眩む。それは、狭過ぎる道で先へ行こうとしないまま、じっと目を逸らさずにさえ、そう見えていて、もうどうでも目は眩んでいるので、道を逸れても仕方ないとも思わせる。では道を逸れると逸れないの違いは何。或いは同じ目が眩むでも、目が眩んで見えないだけで違う事が起こって、それで行く先も変わらざるを得ないのかも知れない。ただそうだとしても、目が眩んで何処へ行こうとも出来ないのは同じで、入り組

む道を果てなく進んだ果てに、何処へも行けない狭い道に辿り着いてしまうしかなかったようでもある。だとしたら道に別の道はない。道は実は一本で、一本でないのは道と道が互いを写し合って、それがまた写し合うせいで目の眩む程入り組んでしまうが、元が一本では、振り返っても振り返っても戻れない道が、同じ一枚の鏡に映るように引かれるだけ。しかしそんな事になってしまうのは、何処へも行けない狭過ぎる道へ来てしまっているからで、そうでなかったら、入り組む中へ迷いこそすれ、それぞれの道の様を見分け、目は眩まされず、何時かは何処かへ辿り着けたりもしそうではある。しかしそんな道が果たして道か。当て所なく彷徨い歩いた後を振り返り、通って来た所を辿り直して線を引いているだけでは。勿論それを道と呼んでしまえば、そう呼ばれるしかない道だが、それでは、道は過ぎ去った後ろにしかない。前を向いて道を探せば、そこを通れたら道になるだろう所を見付けて道と呼んで、そこを通って行く気分は気分として、その道の気分を取り除ければ、通れてしまう所が悉く取り除けられるのだから、何処へも行けない道しか見付からない筈。それも見付かればで、見付からなければならない訳もない。道の見付からないのを、何処へも行けない道が見付かった事にしているだけか、それなら、見付かっていない道を見付けたに過ぎない。しかし他に見付からないならやはり、何処へも行けない狭過ぎる道だけが、何時までもそのまま損なわれずに、道として全く揺るぎ

ないものであるしかない。道としては間違いなくそうでも、その道が、何処へも行けない他に何の用もなさないのも確か。抑も道は何処かへ行くためのものか。そこを通るものを何処かへ連れて行くために道なのか。何処かへ行きたいなら、そこへ向かって行けば良いだけで。いや、そのために道を見付けなければならない。たとえ道なき道だろうと、そこへ通じる道を通って、そこへ行ける。目の眩んだまま彷徨い歩いただけにしても、そこへ行き着けたのなら、道は見付けられていたのでしかない。それなら、何処へも行けない所へ行こうとして、或いは行くしかなくて、そこへ通じる道を見付け、この狭過ぎる道へ来てしまった。来てしまったと言うより、その一本の道をずっと通って来て、その見付けた道の狭さにやっと向き合わされたとも。向き合えて何がどうなる。その何処へも行けない狭い道を、ずっと何処へも行けないまま通っていて、これまでもこれからも、それが続くだけでは。それでいいのか。とはつまり、それで何処へも行けない所へ行けているか、少しでも近付けているか、或いはそこへ行けていなくても、それは必ずしも悪い事ではないのか。ただそんな良し悪しの見分けられて何がどうなるでもなさそうで、それよりも、この続くだけの行く末の見極めが肝要だろうが、その見えて来ないのも、道の狭さに塞がれているからなら、それに従うまでではあるが。或いは、その従うまでが、見極められる限りの行く末だろうか。何処へも行けない狭さを見極められているの

なら、そうかも知れない。で何処へも行けない狭さは見極められているか。何に付け、見極められているかどうかなど、どうして見極められよう。それが出来ないので狭過ぎる道を何処へも行けない、とだけは見極められもしていそうだが、それは多分、出来ない事を繋げているからだけで。出来ないが繋がる限り、その限りが知れなくても、それをそうとは見極めが付くだろう。見極めなければならないのは、その限りの知れるしかない所に違いない、そんな所があればだが。とはつまり、道の狭さの事、或いは、狭過ぎるが故の道の事。しかしその見極められていなくて、どうしてそれを狭過ぎて何処へも行けない道と決め付けてしまえる。実はそんな道へは来ていなくて、一度も通ってもいなくて、ただ、ここに道があるならどんな道かと思い巡らしてるだけでは。抑も、道とは何。他の誰かが通った跡なら眺められ、それを自らの通ったようにそれらしく置き換えているだけでは。道は、離れた所から見付けられてしか道でなく、そこを通るのに道など知った事ではなく、その通るしかないように通るだけ。通るだけなら道など要らない。通る事も要らないし事に依れば通ってもいない。遣る事為す事の、その痕跡はどれも、見ようによっては道であるし道でない。確かにそれはそうだが、そんなものの事を思い巡らそうとしているか。そんな道の事ではない。しかしその他の道はない、それならそれは、道と呼ぶしかない道でない何かであるしかない。実は道でないなら、確かにそれは道に

して狭過ぎるだろうし、何処へも行ける筈もない。それは思い巡らされているのではなく、そこにあるのではないか。恐らくは、それだけが。思い巡らせるのは、それを道に擬えての事だけに違いない、あるままのそれでは、思い巡らせようもなく。さてそんな事だとして、どうなのか。あるものだけがあるだけの事。いや、何故、例え偶々だったにしろ、擬えるのが道でなければならなかったかは残る。あるものだけがある上で、やはりそれは、どのようにか、と言うより、どのようにでもなくにしろ、道であるしかない。そのような道が、あるだけの事を、貫くか掠めるか逸れるか、或いはどのようにかしていなければ済まない。行けようが行けまいが、その道を行こう、と言うべきではないか。他にない。しかしそうでも、狭過ぎて何処へも行けないように、そうは言えそうにない。その道でさえ、離れた所から見付けられてしか道でないからか。いや離れた所など何処にもないなら、初めからその道は、行く行かないの道でなく、行くも行かないもない道。ただその道がなければ、あるだけの事もそのようでなかったかも知れない、そのためだけに道であるとも言えるような道。いや、あるだけの事があろうとなかろうと係わりなしの道かも知れない。その方がありそうだ。あるだけのものがあるより先に、その道は、何ものにも損なわれず、他を押し退けてそこにあった。何のために、と問うもののために。まるでそうでなくても問うものにはそうであるしかなく。問うものは道に待たれて

いた、道にはそうであってもなくても、問うものにはそうであるしかなく。待たれるために、が答えであるしかないが、それはそうであるしかなくて答えであるに過ぎない。そうでなければ答えでないなら、その問いもまた問いであるしかなくて問いであり、問いでなければ問いでない。それならば問いでない問いのために道なのか。問うものにはそうであるしかないかどうかも知れずに。それなら、その知れないのを知らせる道ではありそうだが、そんな事は疾っくに知られていたようでもあれば、やはり道には用はなく、（二〇一三年二月十九日）

（どの音も間違って…）

どの音も間違っているのは、それらが直ぐに壊れるので分かる。壊れてもそのままに、それでも音であろうとするかのように、その音のあった辺りに残る。それは、もう壊れないので音とは似ても似つかない。しかしその似つかないところが、それを音そっくりにする。しかも壊れないので、間違っていない音が鳴っているとも聞こえてしまう。これらは、この僅かな土地でだけ起こっていて、直ぐ隣の土地では、大抵の音は、間違っていないらしく壊れたりせず、少

しの響きも残さずに当たり前に跡形なく消えて行く。隣との境でもはっきりすれば、その違いについて少しは分かりそうだが、境らしき辺りは、音どころか僅かな響きさえ、そこを照らす光りによって厳しく拒まれている。光りの来る方に昼の月が見上げられると、その光りはまるで光りでなく、月の音の落ちて来たもので、それは酷く荒削りで、透き通った臍の緒のように月まで一繋がりで、決して拡がりもせず、その見える限りより他のものを一切漏らさない。まるで目に見えず触れられもしない月まで届く石、と思えると、それはあっさり月と切れ、すっかり地上に降り、土を水のように撫でる。それでその境らしき辺りの一帯は、すっかり月の音に占められ、隣の土地をその向こうへ隔てた。それでもまだそれは月の音か。月とは切れ、音とも見えず、響きも震えもせず。月の音と呼んでおけば、取り敢えずは、元は地上にはなかったものだとは言えているが。で、そんなものと接して、壊れてそのままの間違った音は、どうなる。どうにもならないなら構わないが、その音そっくりの壊れたものは、更に壊れ直したかして、もう音そっくりでさえない。音とも見えず、響きも震えもしないなら、月の音と何が違う。ただそれとの境は、はっきりしている。確かな線を引ける。その線に近寄る分、線は幾らでも細くなって、ぼやけも揺れもしない。しかしそれで、境のこちらとあちらの違いが分かる訳ではない。どちらも同じ月の音と呼んで障りはない。寧ろ線の引かれる方が妙で、或いはそれ

は境を示すのとは別の事をしているような。そうして線に目を凝らす程、この元々僅かな土地は更に狭まり、倣うように、線を越えた方も、殆ど石粒一個かと見える程に縮んでしまう。しかしその石粒の、こちらの片面にだけ境の線は引かれ、向こうの片面に何の線も見えないなら、石粒の見掛けは半面で、奥に限りない拡がりが控えていないとも限らない。それならひょっとして、と振り返ると、限りない拡がりが後ろへ続く。それで僅かな土地は跡形もなく見失われた。それでしかし、限りない拡がりへと全てが消えるでもなく、新しい事の何も起こらないなら、こちらには月の音と呼ばれるものさえあれば済むらしい。では石粒の方は。相変わらず片面の石粒だが、その何処にも月の音は見当たらない。その奥の拡がりへと消え、その先の何処かに恐らく月もあるなら、そこへと音は引き戻されたかも知れない。そうして、僅かな土地に鳴った月の音と呼ばれるものと、それと境を接する石粒の片面だけが残ったのだが、その境はと言うと。例えば音と音、土地と土地なら、境目はあろうが、凡そそうでないなら引かれる筈のない線で。するとやはりそれは、境を示すのと別の事をしていて、そのためにどうでも引かれなければならなかったに違いない。その別の事は、別の事でしかない。そうとしか知りようはない。それならそれは、何ものとも結び付かない、全く線であるだけの線としてしか扱いようはない。月の音と呼んだのに倣って、月の線とでも呼びたい。そうしてその呼び名を与えて

みると、線という線は、そんな月の線と見えて来ないか。線は、何ものとも結び付かない。結び付いたなら、その結び付いたものと一つになって、線としては消えるしかない。線であるだけの線でない線などは線ではなく、線に纏わり付いたあれこれが、線を真似て線の上に引いた贋の線でしかない。いや贋の線と雖も、何ものとも結び付かないなら、贋のままに線であるのは紛れもない。線に贋であるもないもない。引かれる筈がなかろうと、引かれてしまえば、それはそれだけのもので、そのままには何かと結び付きはしない。そうして線はどのようにも何処にでも引かれ、線の引かれない所が見付かれば、それだけで、そこへともう線は引かれている。それでもまだ月の線か。そう呼んで困る事もない。元は地上になかったかも知れないようには言えている。実はそう呼ばれなければならない訳を隠しているかも知れないままに。で、その線で全ては埋め尽くされる。それを破って浮き出られるものなどない。それを眺めるしかなければもう、分かるしかない。初めから、音も音でないも光りも光りでないも、別の事も知りようもないも何も、ここは月ではないのに、全ては月の事と。但し、その月とは、あの昼の月と限るものでなく、地上と別の何処かという事を含む。何もが、そんな月の事であるだけのここ。いや土地の失われているなら、ここもなしに、ただ月の事だけがある。月の音と呼ばれるものと、それと境を接する石粒の片面だけが残ったのも、その境の線も、別に何の事でもない。そ

れから目を逸らせば、それだけで、それとは別の月の事が現れて来て、切りはない。それならもう何を何と、目に留めるも耳に入れるも要らないかも知れない。月の事だけが溢れて流れて或いは燃え盛り或いは深くへ沈んでも行く、それを眺めるでもなく遣り過ごす他にない。しかし実際にそんな事をしているか。勿論そんな問いも要らないのだが。いや、果たしてそうか。寧ろその問いの答えでない答えが、月の事なのでは。そうであるなら、月の事はまた、もっと別の事でも構わない。月よりも更に見知らない事なら尚良いかも知れない。或いは、答えでない答えなど要らないに違いないなら、別の事である事もない。ただどうにも何やらの事が現れるしかないなら、そうあるままにさせるだけ。つまりは、月の事、で何の障りもないなら、問いも答えもなく、それで構わない。いや一体何に何が構わない。その何も分からずに構わないと決め付けたところで、何一つ決め付けられていない。構わないの行方は知れない。恐らくは、月よりもっと見知らぬ方へ消えたか、そうでないならそうでない方へ。そしてそれは何の終わりでもないなら、やはり、そうでない方へでも月の事を探すしかない。見知らぬ事を探す訳にも行かず、他に探すものもなければ。どうなってしまったのだろう、月の事は。それを取り戻そうとするのがただ一つの事なら、取り戻せるかも知れないただ一つの事を月の事と呼ぶしかないのかも知れず、しかし、それを取り戻そうとするとは、それを月の事と呼ぶ事でしかないので

はないか。そう呼ばれるしかないだけの月の事。それで何が取り戻せよう。そう呼ぶ事をしか取り戻せないなら、取り戻せる限りはもう取り戻せている。どうやら月とは、そんなような事であって、そう分かってしまえば色褪せて、もう用済みと捨てられて仕方ない。その捨てられたらしい殆ど真下の低い所へと急な階段が延び、そこを落ちるように下って行く。そこは上から眺める限りは、月の光りが輝く壁のように四方を塞ぐ狭い土地だが、降り立ってみると土地は壁諸共直ぐに砕け散って、月の音と石粒の片面だけが洗い出されるように浮き立てば、その境の線を探すしかない。見付からないなら線を引くしかなく、それは直ぐに引けるが、傷口が爛れるように線はぱっくりと口を開け、その奥に、もっと急な長い階段が下って行くのが覗ける。そこを落ちるしかなく落ち下って行くと、もっと狭い土地が、そこに降り立てたかどうかも知れぬ間に直ぐに粉々に散って、線である筈の境目だけが、尖ったように初めから口を開けていて、その奥にまた落ちて行くしかない階段が。それを続ける内、落ちて行くと見せ掛けられた体は、狭くなるばかりの土地と共にぐんぐん高い方へ昇って行くのが分かり、その感じが恐らくは月のようで、ただそれをどう呼ぶかは、（二〇一三年三月八日）

（桜の樹の下には…）

（戯作）

桜の樹の下には屍体は埋まっていない。何故って、試しに根元で足を鳴らして見ろ。ふわふわと軽い音が地中から跳ね上がって来るだろう。きっとお前の足は弾んで、止めるのも儘ならない。そこはもう空っぽなんだ。かの頃には、K氏の透かし見た通り、馬や犬猫や人のような屍体が絡み合って腐爛し、根は忙しくそれを吸い上げていたが、今はもう何もない。しかし屍体は消えてなくなったのではない。咲き乱れる桜の樹のその痛い程に隅々までが、丸ごと一つの、永年吸い上げて来た数え切れない屍体の混ざり合った姿なのだ。その腐臭の幾重にも周りに撒き散らされているのを嗅ぎ取れない筈はない。それでも、酒宴をひらいている者等の匂いに掻き消されてしまうようなのは、実は彼らも同じ死臭を漂わせているからで、己等のその陰気な匂いに酔うために、桜の下はなくてはならない。いや彼らの渇いた心など、どうでも良い。桜の樹の根はもう、かの腐乱屍体の水晶のような液は吸えずに、他の養分を吸う程に腐って縮み、枝は当てもなく延びる程に硬く枯れるように角張って行く。花弁ばかりが、凍った夢のように変わらない形を並べ、蕊は飽かず夢の殻を震わし鳴らすように、さ青に煙る花の艶を、惨忍な今この時の中へと打ち付けている。それ

らは、この一つの屍体となった樹の、より高みを目指すしかない姿であって、そのもう直ぐ間近の青空を掴み取ろうと、身を捩るかのようではないか。その青空の更に高い奥にこそ、決して思いも寄らない数の、見知らぬ屍体が隙なくびっしりと埋まっている！　美しい透視術なんかじゃない。美しさやら神秘だのは欠片もない。見失われる間際の点程にも小さな屍体の一つ一つが、それぞれの決まった形を捻り回して組み合わさり、それでも絶えず動き回り向きを変えながら、その全体で、限りなく大きな青い半球の裏に張り付いて、その形の完全な静止がずっと持ち堪えられるように図っている。見渡す限り空の至る所で、屍体の擦れ合う音、互いを傷付けて滴る液の煌めき、湧き出た蛆共のぴちぴちと這い回る感触、あらゆる生き物の死臭の混じり合えば最早死臭とも嗅ぎ取りようのない天を突き抜ける後光のような匂い、それらが、幾種類も重なり合う音楽の狭間に滲む幻覚のように響き渡る。ああ、これでもう俺には何の惨劇も要らない。俺の心象は、かくも明確だ。憂鬱の完成は、この空に蔑まれて真っ盛りな桜色に立ち揺らぐ生殖の光彩。と思う刹那、たった一つの見失われた点より小さな形が、青の奥深く遠くで、僅かに向きを変え損なって、それで空の全ての屍体が、青を破って丸ごと落ちて来るしかなくなった。それらが物凄い勢いで地上に叩き付けられたなら、成る程、用済みの惨劇の結末としては良く出来ている。点程だった屍体はどれも、落ちる速さの増す程に、灼熱し

た宙を途方もなく脹れながら鯨のようにのたくって、腐臭はそれぞれに鋭い叫びを上げ続ける爆風のようで、弾ける液や蛆共の大豪雨諸共、一斉に地上に降り懸かる。春を栄えた命の全ては打ちのめされ、地の果てまでも、どろどろと蠢きうねる数知れない屍体ばかりの海に暗く沈むのだ。いやしかし、それらどれもが、桜の透き通つた花弁の一枚一枚に、落ちる勢いのままにもふわりと吸い取られ、その花弁は散って地面に積もり、光りにちぢれた何万匹の薄羽かげろうの翅に被われた水の面もすっかり隠し、先程まで貪婪に天に嗜まれていた数知れない屍体らは、濡れて腐った花弁の裏で静かにその形を復しては、地中へと染みて降りて行く。そうして、生きた事もない生き物の屍体であるかに、腐って土に還るどころか、地中の養分を吸い取って、歪に肥え太るのを已めない。それらは、屍体の姿を硬く晒すばかりな桜の樹などさっぱり忘れ、地の底の底までも、この星を蝕んで行くだろう。それらを地中に掘り当てても、透き通った大きな穴が口を開けるだけで、その何もない奥へ瞳を据えればもう、墓場を発く胎児のように丸まって、そこへ転げ込んで行くしかない。そうしてその中へ落ちて戻れない俺だけは、何の養分も吸い取らずに済んで、養分となって吸い取られもせず、流れに浮かぶ紙で出来た箱にひっそり閉じ込められて和むかに、ますますちっぽけに硬く、ただ何時までも腐り続けられる。その嬉しさに貫かれた体は、何処へ行き果てようと、よく廻った独楽にも似て平衡を失

わず、桜の樹の不安そうな根などが届く筈もない。それをお前が斜めに眺め下ろして村人と花見の酒を呑むとすれば、低過ぎる静かな空は重く朦朧なままに押し被さり、爛漫と吹雪く花の陰に忽ちお前の息は絶え、その屍体はそこに、桜の樹の真新しい空想となって埋められ、(二〇一三年四月四日)

(先が知れないのは…)

先が知れないのは、頼りの足元がすっかり飾りで溢れ、そのどれもが、ここを行き止まりであると示しているからだが、互いに繋がりはなく隙間だらけで、行き止まりどころか何処へでも行けそう、と思わせて隙間こそが、バラバラな飾りを繋ぎ合わせ、隙なくそこを塞ぐようでもある。しかし隙間は隙間、こちらが少し向きを変えれば忽ち擦り抜けられる筈。そうさせないように飾りはどれも、これ見よがしにそれぞれの仕方で妙な形を隙間へ向けて尖らせる。それならそれらは、そのように役に立って飾りではないのに、どうにも飾りにしか見えないのは、やはり隙間は隙間だからか。いや尖った妙な形に隙なく取り囲まれ、隙間は実際には塞がっているも同じ。それともそんな見掛けだけでない何かを隙間は隠していて、それが、隙間の周りをただの飾りにしてしまうとも。

或いは、そう思わせるのが隙間の遣り方、つまり、周りを飾りだらけと見せて、隙間は何かを隠していると疑わせる、そんな隙間なりの企みに、気付かされる。その先を知るには、隙間の先へ抜けるか、せめて抜けようと試みるしかない。で、その逆に、そこを行き止まりと思い定め、或いは碌に思い定めもせず、ありもしないかも知れない後ろを向いた事にすれば、そこはもう何時もの、狭いばかりが心地良い、まるでそうは見えないが、通ってみれば何も遮るもののない平らな一本道。だったが、遮るものがなさ過ぎても道は見失われるに決まっていて、何処かで道を外れ、そこは、そこがそこであるなら、偶々選ばれてしまった隙間の一つであるしかない。一つであっても一つでない。隙間は隙間と繋がって数えられないので。隙間と繋がれないなら、そこは隙間ではなく行き止まりで、隙間である限り行き止まりへは行き着けようもなく、それで何処へでも隙間を抜けては行ける。しかし却って隙間の先へは抜けられない。どの隙間も、その周りを飾るものの僅かな影もない。それならこうして動き回る身は。隙間に必要なのは隙間だけ、そこを動き回るものなど、さぞ妙で役に立たない飾りに違いなく、他に何もなければそのままに、ここを行き止まりと示すしかなさそうではないか。しかし飾りであるにも、それなりの隙間との係わりがなければならないが、そんなものがあるか、と立ち止まりでもしたせいか、隙間からも隙間と隙間の繋がりからも外れたらしく、急に広い所へ出た。入り込め

そうな隙間など、何処まで見渡しても見当たらない。遮るものの何もない足も竦む程に無闇と広いだけの拡がりに投げ出されて、為す術もない。いやそんな、広いばかりの所などは、少しも広くない。広いかどうかなど決して分からないならそこは広いかも知れないが、それも、そのように広いかも知れなければ少しも広くない。つまりは、広い所などその広さによって何処にもない。もしあっても行けない。それなら、直ぐに無闇と広いと言えてしまうばかりの、どうにも狭い所へ押し込められてしまったに違いない。そこから隈無く澄み渡った青空が見渡せても、そのただ一つばかりの果てのない青空の、何処へも繋がらない耐え難い狭さに打ちのめされ、もうその青空に押し潰されている。いや、北のずっと遠い空の極狭いそこでだけ、空の形はただ身動ぎもせず真西を向いて、入り組んだ雲を分厚く織り上げ、激しく焼けた陽は暮れ掛けて、その遠いままに手に取る程に直ぐ間近にそれが迫れば、澄み渡る青空もそのまま、二つの空の繋がりも見出せない。それでも、空の広いばかりの狭さに閉ざされるのからは抜け出せていないか。その抜け出す先は勿論、北の彼方の西を向く空でも、高く澄んだ青空でもない。その空と空の隙間でもない。その何処かなら、抜け出せたようなだけで、そこへまた閉ざされるだけ。しかし見る間に、北の夕焼けの陽は反り返るように窄んで落ちた。見上げる青空の何処にも陽は見付からない。北は、西ではなかったか。遠い西の空が、北を向いていたのでは。

分からないままそこだけは、地平線を這うような闇が滲んで、その奥の微かに透ける色と形は、引き裂かれるように騒がしい。その剥き出しの色と形に触れなければならないならば、それでそこへ行くための隙間は見付かっていて、もうそこを走っている。しかし何がそうだ隙間そのものが、一本道のように走るのでは。それも入り組むばかりに。そんな隙間ばかり走っても、何処かへ畳み込まれてしまうしかない。しかしそんな何処かなどない。置き去りにされた筈のこの身しか。それならこの身の奥に、引き裂かれるような色と形の塊が、隙間の届くのを待っている。地平線の闇はもう、先回りするかのように、そこへと巻き込まれている。そこは捩れながら盛り上がる僅かな土地に見えて、絞り上げられるように益益狭くなる程に、広さが滲み出るように拡がってしまう。それは、広い程に広くなくなる広さとは違う、狭さを寄せ付けない、或いは入り込んだ狭さを確実に絞め殺して行くような広さ、それも絞め殺された狭さの一つ一つが広さへと転じて積み上がるような広さで、その拡がりの遠い果てに、横を向いた小さな一つの青空が半球の欠ける所なく隈無く澄み渡って見付かれば、広さは揺るがない。そしてその青空を別にすれば、拡がりはもう、渦を巻く細い隙間で隙なく埋まり、色と形は間違いなくその中心に押し込められている筈でも、敷き詰められた隙間の渦に妨げられて触れようもない。或いは隙間はそうして、色と形に、触れる限りの窮みを尽くしているようでもある。実際

そこからは僅かの闇も滲まないが、その上は、何も見出せないなら、闇の滲むだけの拡がりであるしかない。勿論そう見えはしない。見えていれば、そこに剥き出しの色と形も見えなければならない。しかし色と形の透けて来ない闇とは。きっとそれも、狭さが殺され、広さばかりのせいだ。しかし青空だけは何故、拡がりの果てに狭く留まるままか。と、青空は見失われていて、探せば、見付からないままの青空の下から、隙間の渦の中心へ隙間が一筋に向かう。隙間の渦の凹凸に危うく巻き込まれそうに傾きながらも真っ直ぐに遣って来る。少しも入り組んだりせず、真っ直ぐ過ぎて所々では消えて見える。闇の滲むだけの拡がりは払い除けられ、替わってその真っ直ぐな隙間からだけ滲み出る闇が強く高く放たれる。その闇がその隙間の周りに螺旋を描けば、そこに剥き出しの色と形が透けて来る。そうしてその隙間が、隙間の渦の中心に届くと渦は呆気なく消え、消えた上にその隙間だけが残って点になって留まれば、それは紛れもない行き止まりではないか。そこを様々な色と形が取り囲み、それらから滲む闇が浮き立つのは、色も形も闇さえも、飾りであるのを際立たせるようなのに、それらはしかし、そこが行き止まりであるのを示すどころか、行き止まった事に抗うように隙間を揺さぶり、隙間は震えて点に留まれない。そのままに隙間は限りなく入り組むしかなくなれば、それを震わせていた闇も色と形も同じに入り組んで、もう小さなぼやけた染みになり、見る見る掠れて消え、

その上はまた闇の滲むだけの拡がりに覆われる。とは言ってもやはりその拡がりは、闇が滲むとは見えないで、広いばかりの狭い所へ押し込められてしまった隙間など何処にも入り込めない。また広いばかりの拡がりが拡がるばかり。隙間なか。いや、もう青空も北の彼方の焼ける陽も、それに替わるものも見通せなければ、拡がりばかりの拡がりとは何。広いも狭いもそれへは係われないなら、何も拡がらない拡がり。ただ一つの隙間と言えば隙間、つまりは行き止まり、に行き着けたのではないか。広さもそこで行き止まり、狭さもそこで行き止まり、二つの行き止まりがそこで繋がって繋ぎ目もない。それなら行き止まりようもなく、行き止まりようもなくての、欠ける所のない行き止まりで、それで何処へも抜け出せないのは、何処からも抜け出せているからで、(二〇一三年四月二十三日)

(幻にばかり触れていると…)

幻にばかり触れていると、ただ触れられるものがそれだけで幻なのだと分かる。触れられさえしなければ、それは幻の姿を借りた幻でないもの、その在る所に在るままに在るものとでも考えるしかない。また、触れようにも手の届か

ないものがあり、その触れられないままでは幻ではないのだが、それは触れようともされていないからに過ぎず、どのようにか触れられるなら幻である訳で、一つ残らず、その後を追う。追い詰めて、その手の届かない姿のままを、触れられる所まで連れて帰るためだが易しくはない。力任せでは何ともならず、途中で逃がしたら見付かるまで探し回る覚悟は揺るがない。しかし吐いた息が乱れたかして弾みで見失っただけなので、その逃がした所に直に見付かる。例えば、呼び掛けて来るように昼のくっきりと丸い月が目の縁を掠めれば、青い空を見上げるしかなく、その空が扇形に強張って、昼の月を嫌うかに、その扇を拡げた方へ飛び去ろうとしていれば、その向かう先、空の向こうまで空を追って行く。そんな事が出来るか、などと考えたら終わり。だからもう終わっている。しかしその終わりは、見失ったままの終わりであって、その見失った終わりに目を凝らしてさえいられたら、追う始まりが終わっただけ。考えた事など置き去りにされた昼の月と同じで何時でも捨てられる、その何時かが決まらないだけで。そうしている間にも別の手の届かない幻が遣って来るが、その見えている所に次々に溜まりはしても流れて消えたりはせず、当面追う手間も省ける。さて、何故そんなに幻が入り用かだが、何処まで遡れるか分からない程古くから分かり切っていて、直ぐそこまで迫る戦いに備えるため。直ぐそこと言っても、直ぐそこは何処までも直ぐそこ、直ぐそこでない所などなく、だから

ずっと備えに怠りは許されない。それも、幻を追うばかりでは備えにならない。幻とどう係わるか知れないがそれなりの技を磨かなければならず、その磨き方は、幻の決して届かない狭く寂しい細長い窪地の奥の枯れた川の底の裏側にでも、或いはそれと同じ程に入り組んだ思いも寄らない所にでも記されている筈だが、先ずは幻を通り抜けないで、どうしてそこへ行けるだろう。そんな訳で、備えなければならない内の、どれ程が出来ているか誠に心許ない。それなら、手元に集まっている幻だけで何とか事に当たる技を編み出しておくべきでは。しかしどんな技。幻など戦いにどう生かせよう。実はただ時を稼ぐために幻が集められている、と言うのも、なくはないのかも知れない。敵が勝手に、乱雑なままの幻に惑わされでもしてくれたらそれは楽しいが、恐らくは全く敵の目にも留まらず、却ってこちらの足手纏い。それならと手当たり次第に新しい事に挑んでも、例えばどのようにか幻を捩じ曲げ、それを防具や攻め道具に作り替えても、その新しい試みの数々は、我楽多になった幻と共に古びて行くだけ。そうなる位なら、思い付いたままの新しいままに放って置く方が、カラ元気の素位にはなりそう。或いは、新しいまま同士が係わり合って、新しくさえない程のものへ、更に新しくなって行くかも知れない。それならそうして何もせず、ただ幻を用いる技、或いは技らしきものを巡ってあれこれ思い描くのが、編み出し得るただ一つの技に違いない。そうであればその技を磨くのは、そのまま

に、集めた幻を技か技らしきものへ磨く事であるしかなく、そうして磨かれる程、幻は入り組んで扱い難く触れ難くなり、幻を用いた技を思い描き尽くせば、その並べられた技の数々に阻まれて、全く触れられなくなってしまう。拙い事かも知れなくても止めようはない。技なら磨くしかないので。そうして、触れられるのは、幻を用いた技を思い描く技しかなくなる。しかし肝腎の幻が、もう触れられないなら、それは幻であったものではあっても幻ではない。と言う訳で、その磨き上げた技の中身は空っぽであるしかない。であっても空っぽなど知れた事。触れられるならその技は幻、それも、他に替え難いただ一つの幻を手にしたのであり、もうあれこれの幻の後を追わなくて済む筈だし、追うも何も他の幻は現れようもない。そうしてただ一つの、ただ触れられてだけ幻である幻が残る。そしてそこに何の中身もないとなれば、幻は、ただそれに触れられると言う事であるしかなく、触れられる何かだけがあって、それはただそれのままに何処までも幻。それはしかし抑も、幻にばかり触れているせいでそうなってしまっただけで、そんな事をしなければそうならなかったかも知れない。それはそうだが、幻にばかり触れる他に何が出来たか。戦いは直ぐそこなのだ。いや戦いなど実は幻に比べれば知れた事。戦いの備えが戦いを呑み込むの図で、ただ一つ触れられるもの即ち幻があれば、戦いなど始末が着いたも同じ、後は戦いの真似事で戦いの終わりが表されれば、幻さえ用済みとなって、もう何も

触れられるものはなく、なくても構わなくて、触れられないものの即ちその在る所に在るままに在るものとでも考えるしかないものが、地の果ての見渡す限りを取り囲むだけ。それでも狭く寂しい細長い窪地の奥の枯れた川の底の裏側を丁寧に覗き込んでしまうのは、始末の着いたのは、幻によって備え得る戦いだけであって、触れられないものを巡る戦いは、寧ろ始まったばかりではないか、と言う気懸かりからに違いない。いやその戦いも始末が着いたと言えば着いたのかも知れない、始末の着けようがないと言う着け方で。触れられないものとは戦いようもないか、或いは戦うだけなら幾らでも戦いようはあっても行き着く先は、始末の着けようがないと言う所に決まっている。であるならそんな行き着く先には触れられて、その幻でなくて何。その幻に触れるばかりの所からは、どれ程遠く広い地の果てても見る間に霞む。それでも川の底の裏側に記された戦いの技の磨き方が頭に入ったのは大いなる成果かも知れず、幻である戦いの始末の着けようがない所で、幻を用いる技に磨きを掛けるに何の支障もなく、思う存分磨かれた技は、始末の着けようもなく空回りし続ける。戦いとは何だったか、その空回りの始末こそ戦いの基なら、その終わらせようのない事が、戦いであるに違いない。と言う幻に触れるばかりか、と思い巡らせて空を見上げようにも、空は何処にもない。それはそうだ、何処までも一つの幻の連なりのようでは。しかし空さえ見付けられずに何の幻か、幻だけの幻に自らを幻とり

証せるか、と言う遅過ぎた問いが、どちらが空の向こうか分からないまま、空を追って過ぎて行くなら、その問いは必ず、空の見付からないまでも空と入れ替わった何かを見付ける筈で、そうしてその問いが、幻を抜けた先へも届くなら、当然それは触れようもなく、紛れもなく幻ではない。いやその筈が、そうではない。あちらとこちらが入れ替わるとでも言うべきか、幻を抜けた先となれば、触れられないものが、ただそれだけで幻では。何故なら、幻を抜けた先なら触れられるものはどれも幻ではない筈で、それでも触れられないものがそこに入り込めば、それが幻になるしかないから。そうして、何処もが一つの幻の先にも、幻が繋がって行くなら、空回りも逃げ場なく幻であるしかなく、それで戦いの始末も着いたのではないか。或いは逆に、一つの幻の先の幻が、一つの幻へと戦端を開いたとも見える。ただその戦端が、孰れは戦いの始末を導き出すに違いなければ、やはりその始末も見えていると言えなくもない。しかしそれは分からない。幻の中に、戦端にも逃げ場はない。ずっと変わらず戦端であり続けるなら、戦いの始末は決して着かない。それなら戦端など取るに足らず、空回りを続ける技も、それは一体何の技かと言う程に取るに足らない。そんな取るに足らない事に足を取られているのなら戦いの備えなど全く覚束なく、戦おうにも直ぐそこの戦いの背中は遠ざかる一方か、或いは疾っくに、先のない戦いの渦中にあって幻は大いに活かされ、（二〇一三年五月四日）

（この辺りは酷く狭い…）

　この辺りは酷く狭いせいで吹き続ける風は刻々新しく、吹き過ぎた風は戻らない。その風ですらそれを嫌い、ここを離れたくて堪らない。その時は来る。そのために風までがここに留まるのだし、その時が来ないと定まりでもしたら、ここはもう何処へとも紛れてしまっているだろうし、その時の匂いのようなものが、そうならないよう押し止めている。その来るべき知らせにずっと耳を澄ませているし、実は知らせはもう幾つか手元にあって、それに繰り返し似たような検討を加えるしか能がないのにも、うんざりしている。しかし考えようではそれも捨てたものではない。似たような検討とは言え、鸚鵡返しをしているのではない。ここから奥地へ向かう企みは、検討の積み重ねを元に、これでもかと言う程に謀りに謀られ、鮮やかに研ぎ澄まされている。後は、耳新しい知らせさえ届くなら道は切り拓かれる。そして道なら切り拓かれていて、あり得ないような動きをする風が次々にそこを遣って来て、それまでの風など脇へ遣られ傾いて為す術なくくるくる回るばかり。ここが奥地だったのだ。それなら謀りに謀ったのは何だったか。一体何処を向いていたか。道は一本ではなく、

あちらこちらから来ては、ただ風を送り込み、その風に掻き消されるように直にまた塞がれる。しかし風は吹き過ぎず、それで違う風が幾つも狭い中に犇めけば、吹き飛ばされないものはない。そこはもう、ここではない。この辺りだった所は風に弾かれ行方知れず、奥地も何もない。それでも幸い、かどうか知れないが、奥地へ向かう企みは鮮やかなまま、当然その中に奥地も無傷のまま。そこへまた、あり得ないような動きの風が突き進んで来る。もう道など要らないらしい。奥地を目指そうと行き惑っている風共が、奥地の匂いだけ嗅ぎ付けて競って寄り集まるよう。しかし企みは所詮企み、そこに奥地がある訳もない。それでも企みに基づいて奥地を目指すなら、ここであった所が行方知れずでは耳新しい知らせなど届く当てもなく、ただその企てを携えて何処へでも行くしかない。風の向くまま、疾っくにもう、そうしてしまっているに違いないが、奥地と奥地でない所の見極めは付けようもなく、謀りに謀ったのも何の為やら。しかし考えようではそれも捨てたものではない。奥地も何もない白い画面に、何にも邪魔されず、企み通りの絵を描けると言う寸法。しかも絵であるも何も、ただ奥地を指す一本の矢印であれば事足りる。その矢印の先に、必ず奥地を目指すと企まれた奥地はなければならないが、その矢印に従って真っ直ぐ進める筈もない、画面に描かれただけの矢印では。しかし後を追って来た頑なな風共は、構わず画面にぶち当たり、そこを掠るように破って突き抜ければ矢印の示

す先が切り拓かれるとでも信じるかに、矢印へ吹き付ける勢いを弱めない。そのあり得ないような動きが啀み合いながら幾つも捩れて縒られて更に重ね合わされば、それはとても風とは見えない硬い尖った頑として動かない、ぐりぐりと激しく盛り上がっては凍るように引き締まる一つの矢印であるしかなく、その先をなら画面の矢印の先と違って見通せる。しかしそこが目指す奥地なら、その風は苦しそうに凝り固まってなどいないで、さっさと飛んで行く。それならそれは目を眩ます邪魔物でしかない、かと言うとそうでもなく、その矢印の形の硬い風の塊に、それに芯を通す要領で、企み通りの矢印を描く。そうして早速目の当たりに出来た、風の尖った先が指し示す奥地は、狭く、ただ風が吹き過ぎるばかりだが、気を落とすには及ばない。寧ろ願ってもない。そこへ身を投げ込んで、その身を、更に奥地へ向かう矢印の姿に整えれば、風の邪魔も入らずに幾らでも奥地へ奥地へと入って行ける。いやそれでは、ただ奥地へ向かう矢印の姿は揺るぎなくても、踏み込まれた奥地は、その矢印の過ぎ去って行く影にでも掻き消されるばかりでは。或いは企まれた奥地とは所詮そのような所か、などと納得も出来ない。何故なら、風が追って来ない。振り返っても風の矢印は見当たらない。踏み込むどころか、奥地も奥地へ向かう企みも見失われ、それでも奥地へ奥地へ向かおうとするこの身はただ、闇雲に奥地を渇望してのたうち回る矢印に過ぎないか、独りはぐれてしまった一筋の風でもあるように。

すると向こうから奥地は遣って来る。そう見えなければ身の置き所もないので、そう見えて来なければならないだけかも知れないが。それでも奥地であるのは紛れもなく、ただ幾らそれが直ぐ側まで近付くようでも、そこへ踏み込みようはない。奥地はどんどん大きくなって後ろにまで拡がって、この身の置き所の他は何処も彼処も奥地に塞がれたか。それならここも奥地であって良さそうなのに、それでもここだけは奥地でないのは何故。と問えば、答えはこの身に行き着いて、この身を奥地へ捨てれば、ここも間違いなく奥地。捨てられない訳もないなら、この身は間違いなく奥地へ捨てられた。ここだった所は、きっと奥地になったろう。一方捨てられたこの身は、奥地を転がるばかりなら奥地でない所へまで転がり出て、気が付けばまた何処か狭い辺りに身を沈め、奥地へ向かう企みを謀るしか能のないものになっている。しかし一から遣り直しかと言うと、そうでもない。耳新しい時の知らせは来ない。待ち望まないので。だから奥地を渇望する闇雲な風を呼び入れてしまったりもしない。その企みに身を沈め、何かをするとすれば奥地からの音や匂いに注意を向ける位だが、音や匂いが届いても、奥地から来るのかどうかなど分かりようもない。寧ろ分かりようもないので、じっと企みに身を沈めて居られる。しかしそんな企みが向かおうとする奥地が、果たして奥地か疑わしい。奥地への弛まぬ拘りは奥地への諦めにすり替えられ、諦めと雖も奥地の匂いはするので、そのすり替えは何も

なかったように巧く隠され、奥地への諦めばかりが企てられてしまっているのでは。尤もそんな企ては、奥地への拘りの消えていない証でもありそうだが、それで良いのか悪いのか。或いは拘りがあるので諦めも諦めへの企みもある、それは良し悪しに係わらず当たり前、寧ろそうして拘りと諦めが釣り合ってしまっている事の良し悪しは。とは言っても、諦めをすっかり諦めて奥地への拘りばかりで何が出来るかは既に見て来たところ。それで何を見て来た、見て来たにしろ、ほんの一つの偶々の成り行きをなぞっただけ。いや、ほんの一つか全く一つかは、分かりようがない。であれば、拘りと諦めを釣り合わせずに絶えず傾かせ揺らし続け、その何処かに奥地への足掛かりでも見付かればと励むしかない。それで何がどうなるか分かりようもないままに。しかし分かりようもなく、そんな事を続けられる筈もないなら、拘りと諦めの間に罅が入って埋めようはなく、拘られる奥地と諦められる奥地が別々に掘り下げられて行くしかない。それはここを益々狭く窮屈にし、身は閉め出されるしかなければ何処へ、奥地へ。或いは間違いなく奥地へ向かう所へ。そこから先は身を頑なな風にでも擬えて、矢印のように突っ伏して進むだけ。などと思い描くのは容易いが、精々一本の矢印に凝り固まってそこに寝転がるのがやっとでは。考えようではそれも捨てたものではない。それはもう奥地へ向かうも向かわないもない姿に違いないので。何も諦めるまでもなく奥地へ向かう企みから抜けら

れて、そのために見出された向きを示す矢印の姿がその証しで、その姿さえ失われなければ、奥地など地上の何処にも見付からない。勿論、地上が全てであるかどうかなど分かる筈もない。ここを地の果てと見定めれば、その向こうが易々と見渡せて、そこに奥地の影の匂いでも、はっきりと見てしまうしかないのかも知れない。しかしその時には、矢印をそちらへ向け、この身の長い影が透き通って、何処か遠い向こうの奥地の辺りへ、ゆるゆると重なってでも行くように、（二〇一三年五月十三日）

（初めから身を隠そうとも…）

初めから身を隠そうともせず、それは踊るように立つ。踊るようでなければ立っていられないらしい。飛び掛かれば丸丸獲れそうなので狙いを定めてはいても、飛び掛かった事はない。飛び掛かれるかどうか試されていない。何が欲しくて飛び掛かる力の湧くのか知れない。或いはそんな力は湧いていない。実はどうやら、目障りに見え隠れする影でも獲ろうとしていた。何かの拍子にその影を振り払えて、その奥にあるものを掴み取る、そんな血塗れの成り行きでも当てにして。それならそれは試されなくても、何がその影を纏おうと、何時まで経っ

てもそれに触れられなくてさえ、獲物ではありそうで、却ってその何時失われるか知れないのを恐れてしまうのは、その姿の血腥い程にまるで見失われそうにないからで。と、影ならば影は、或いは影でなかろうと、それは滲んで消えるように振り払われ、そしてその踊る獲物そのものの、まるで影でないかに紛れもなく濃い影が、激しくその身の脇に切り立って、直ぐ様真下に向かって真つ直ぐ落ちれば、それは振り払えるどころか酷く重く、その影と結び付いた暗い水の下へ獲物の半身は真っ暗く沈んでしまっている。水の下など知らない。水の上の半身は、裸を晒しているようなもので、どうにでも出来るなら飛び掛かるなどは愚かだ。どのような姿にも、こちらの思うまま、それを置き換えられるのだから。確かにそうだろうが、そうして何になる。半身はもう裁きを待つように動かず、そうしているだけでもう、何処へかその姿を眩ましているではないか。置き換えられる姿などはもう、光りが揺れる水に映って、逃げ去ろうとする形に立ち上がる、途切れ途切れの影のようなもの。しかし光りはどうして、その半身を少しも照らさないのだろう。水にしか結び付かない光りなら、それは沼のように淀んで酷く汚れてもいるに違いない。それを浄めるには、恐らくそれよりもっと汚れた火でも要るのだが、そんなものの見付かる筈もないので獲物を追わなければならないのかも知れない。その血が、光りの汚れなど水に流すだろう。その半身が姿を眩ました水の上の辺り、小さな火が並んで点

って、それはそこを囲むように綺麗な円を描くようでもあり、そこから逃れようと並ぶのさえ儘ならず、てんでに乱れるようでもある。それは決して別々にはなく、どちらでもあるようにそこにあるようでは、どうにも扱い難い。その水に映らないのは尤もで、光りとも交わらないに違いない。時が掛かるにしろ、そんな火は消えて行くしかない。先ずは火から裁かれるのだ、と見通すと、そのやはりどちらでもあるようなままに一つに纏まり掛けて、恐らくは、姿を眩ました半身の更に後ろへと慌ただしく隠れるようで、そこから何やら言い掛けて来る。汚れていない、と言っているかも知れないのなら負け惜しみ、火は他の何より汚れていなければならない筈だから。それでもその落ち着き払ったような言い分に押し出されるように、半身は、波打つ白い輝きにゆらゆらと縁取られた姿を晒すしかない。その捩れた姿は、火を呑むな、とだけやっとの事で言っているように聞こえる。しかし火を呑んだのは、そう言うお前ではないのか。呑んではいけない火を呑んで、半身は、水の重い影から身を捻じ切って、重力から放たれたように、しかしその場からは動けずに、のたうち回る。今こそ飛び掛かって、その喉元を食い千切り、果てのない血の祭りに浸る時。しかし重い影を孕んだ水が、その影を押すように膨らみながら迫り寄せる。半身は、撥ね飛ばされるように遠ざかるが、それに連れて揺らいでいた縁取りの輝きは白く細い輪郭線に収まって、半身の形をくっきりと浮き立たせる。しかしもう

半身とも呼べない。それはそのまま、水と戦う全身で、ただそのための踊るような激しい動きに違いない。しかし踊るのはその擲たれたような一身か。白い輪郭線が踊るようでもあるが、それより、輪郭線を取り囲むその外の隠れた何かが踊るようではないか。踊るような動きから、その隠れた姿形を幾らかでも垣間見たい。とそれを探そうとすれば直ぐに誤りに気付かされる。そこに隠れた何かがあると決め付けていただけ。寧ろ、輪郭線の外の果てしなさが踊っている。そう見ようとしなければ、何も見ていないのと変わらない。しかしそれで何が見える。何の姿も現れて来なければ、呑んではいけない、或いは、呑んでしまった火でも力尽くで見るしかない。見えるかは知れずに。或いはそれは火ではなく、火に似てさえもいない、しかし火と見るしかないもので、そうであるなら敢えて追うまでもない。輪郭線の内と外を見極めて、その外が踊っているとさえ分かっていればそれだけの事だが、外に比べて内は、余りにも小さな空っぽではないか。そこに残されるものなど知れているなら、水も光りも全て外で、その果てしなさに含まれるのは明らかで、そんなものに何が何の戦いを挑めるか。挑めるさ、とその踊りの増して行く激しさが、呼び掛けて来る。そしてその声の声にもならない見窄らしさが見窄らしい程、それが、果てしなさを貫いてここまで届いたのだと分かる。果てしなさからしか来ない見窄らしさ、しかしそんな訳の分からないものに気を取られている内に、輪郭線の外は

すっかり見失われ、輪郭線は辛うじて見て取れるのかも知れないが、外を失って内しか向けなければ、それで輪郭を描けるか。輪郭の抜け殻、風には舞うが自らは踊らない。その向けられた内に、何が見付かるでもない。いやそれでもそこに、何も照らさない小さな柔らかい光りが、ひっそりと動かずにいるのは間違いない。それは、そこに影を入り込ませない事だけはしている。そして外からの汚れた光りをも入り込ませていないだろう。或いはそれは、空っぽが自らを照らして見せているだけのようなもので、光りではないのかも知れない。獲物は何処だ、再び獲物に立ち返って汚れに触れなければならない、と思う程、抜け殻とも離れそうに、空っぽは更に小さくなって、柔らかな塊が独り取り残されているようで、それならその見詰める先に、その塊の外があって、その果てしなさも必ずあるのではないか。いや果てしなさなど実は何の事でもない。見詰めたところで眠気が襲って来るのが落ち。しかしその眠気が曲者で、知らぬ間に何処か危うい所へ連れ出され、何の事でもないどころか、取り返しの付かない事から逃れようもない。空っぽは、その危うい所の取り返しの付かない事の一点にまで縮んでしまっているだろう。しかし一点なら、空っぽどころか中は一つの事が隙なく詰まって満ちていて、向くべき果てしなさなど何処にもなく、或いはその一点が、果てしなさが齎す果ての一つの形なのかも知れない。そんなものがじっとして居られる筈がない。それどころか、初めからそんな点

はなかったかのように、もう疾っくに何処かへ消えた後で、そうなればそこに、ずっとそこにあって見過ごされていただけらしい、踊るような激しい動きが、それだけで何も纏わずに戻って来ていて、勿論、影も光りも水も血も寄せ付けず、ただ何より汚れた火を抱きたいに違いない。その火なら初めから、身を隠そうともせず踊るように汚れた土の上に立って、踊るような激しい動きの直ぐ前に身を晒している筈なのに、互いに交わろうとする素振りもない。踊るような激しい動きが、決して汚れを纏えない事が、その妨げとなっているに違いないし、抑もその妨げが踊るような激しい動きを生み出したのなら、抱きたい火は、抱かれたいままにあれば、そのままに全うされている。いや、それこそ火の負け惜しみであって、火は必ず抱かれなければならない。そうとしか望み得ない事が、火の汚れであり、土の上に果てしなく立ち続けるしかない元であって、実は踊るような激しい動きとは、ただ火が火から汚れを消し去った自らの姿に過ぎないのかも知れないなら、火が抱かれたいのはもっと別の、(二〇一三年六月十三日)

(回るにしては後ろへばかり…)

回るにしては後ろへばかり流れ過ぎるようなら、その風の奥は、妙な形に飾られている。或いはただ、風が止まって分厚く見えて、その中に入り込んだ乾いた日差しが散り乱れているだけ。しかし日差しの乱れなら、必ず風を擦り抜けられる。妙な形は裏で繋がっているように、風に逆らって動かない。探せば花の咲くのも草の萌えるのも幾らでも見付かるだろうが、風の奥が気になって、草花はどれも目に留まるより先に風に溶けている。風の奥の妙な形を消せないなら、その替わりにでも消えて行くものがなければならず、それは花や草だけでは全く心許ないが、他を探そうにも風が許さない。しかし、花や草の姿が、目に留まるより先に風に溶けていて、消えて行く花や草と分かるのも妙で、他に色々と地面に見付かる筈だが、その地面が既に怪しい、と言うより、初めから地面は、風に溶ける草花の下に隠れたままでは、あるかないかも知れない。確かに、地面などあっても仕方ない、と思えば別に怪しくもない。実際、消えて行くのは草花ではないのかも知れない。草花であればと、目が求めているだけで。それならその目が求めるままの花を、一輪でも風の下に咲かせてみようか。しかしどうも花とは似ても似つかない。薄っぺらく反り返る鈍色が硬そうに捩れては、あるかないかの地面に突き刺さっては突き上がるを繰り返すばかり。そんなものを目は求めるだろうか。風の奥から引っ張り出されたなら、妙な飾りなどは、こんなものでもありそうではないか。などと思っている内に、

それはそこに狭く尖った穴を掘って消え、直ぐに穴も消え、その僅かに残る痕の上を風が素通りして行けば、もう花は咲かせられそうにない。ただその青味を帯びた蚯蚓腫れのような小さな痕に目を凝らせば、妙な形の飾りは、呆気なくすっかり風に吹き払われ、ただ風はそこで後ろへは流れず、回るままに止まって、止まるなら風ではないだろう。そんな凍ったような、風の回る形をした透き通ったものが、幾つも地面に突き刺さっている。そうして現れた地面はずっと凸凹していて、ざらざらしていて、そのせいで何もそこには留まれず、ただその剥き出すままに風の通った跡を追って拡がって行く。そこへ吹き戻しの明るい柔らかな風が吹けば、凸凹の角角に、蚯蚓腫れのような痕が数え切れず浮かんで、それらは様々な色に染まって一斉に騒ぎ出すようなので、それを恐れるように、戻った風は硬く冷たく強張るしかない。風の回る形の透き通ったものもそこに置き捨てられ、地面は、風の通って来た方へ、くねくねと延びて行く。しかし勢いの割りに直に行き止まってしまえば、そこまでの地面も風の吹いた方へぐらぐらと崩れ落ち、蚯蚓腫れのような痕も、溺れるように姿を消して行くしかない。残るのは、風の回る形の透き通ったものばかりだが、それだけ残っても、形も見失われて透き通っているだけでは、あるかないかも知れたものではない。知れたものでないなら知った事ではない、それを摘み取って束ねれば花。花と似ても似つかないなど知れた事で。ただ地面よりずっと濃く

濁った色のせいで、直ぐにはらはらと落ちて崩れた地面を追う。いや、その追う姿の花に似ている事、まるでずっとただ花だけがあったような。地面の崩れた形の端々までが、その花で覆い尽くされると、花は役割を終えたように、ただ濃く濁った色であるだけになって、地面の崩れた形を際立たせる。その形はどうやら同じ図柄を繰り返し、その図柄は、風の回る形に似ているに違いない。必ず似ていなければならない。そうでなければ、地面の崩れた形も崩れて消えるだろう。しかしどうしたら、その図柄が風の回る形に見えるか。図柄を切り取れてもいない。風の回る形も一度として見えた事はない。もう地面の崩れた形は、消えているかも知れない。際立っているのは、花の濃く濁った色だけで、色にも形があるのかも知れないなら、それは決して図柄に纏まるようなものではなく、何処かの別の遠い色と合図を交わし合うために、絶えず忙しく姿を変えているような形で、そこから、緩い弧を描いて引き延ばされて行く長い声が聞き取れないか。その声が途切れると、その引き延ばされて行った声だけが残って激しく震え、緩い弧が重ねて幾つも描かれ、それがもう数え切れない程になって、そこに遠い色を滲ませる。その色にも形はある。それは、じっと一所を見詰める形で、風の奥の妙な形と同じでなくても、それと結び付いた形に違いない。必ずそうでなければ、風の中に居られたのさえ、なかった事になって消えてしまうに違いない。その見詰められる一所に何が見えて来るでもないが、

そこがそこであるのは見えて、そこは少しずつ柔らかくなって斜めに流れて、弧を描いてどんどん速さを増して落ちて行く。落ちた辺りは、そこから遣って来た所、そこへ戻らなければならない所に違いなく、それでもう地面は透き通った極短い、つるりと硬い弧で、それを渡れば、その目指す所であるしかない。そのそこで私は、その落ちたものを手に取り、隈無くそれを知った。それは、風よりもっと遠い空の奥の、ただ自らのためのように絶えず姿を変える一つの形で、それから私はどうしたろう。恐らくまた風の中へ出て行って、もう一つ帰っては来なかったらしい。戻らなければならない所も風に紛れた。一つ残った形つは、風の奥の形とは折り合えなければ、何処を彷徨くにしろ、私の後を追って形いるのでしかない。そうして花のように隠れながら風の届かない所まで来れば、そこから遠い空の奥までは直ぐそこで、形はそこで様々に姿を変えて様々な色を滲ませ、それらがじっと同じ一所を見詰める形に纏まれば、その一所に何が見えて来るでもないが、そこがそこであるのは見え、そこはただ自らのためのように絶えず姿を変えて、形はそこと一つになって行く。しかしそうなってはか色も形もない。遠い空の奥の直ぐ手前で、透き通ったままに変わり続けるばかりの一つの姿。どう変わり何が透き通るかも定かでなく。ただそれで、風の回る形の透き通ったものが何処で何をしているかが隈無く見通せて、それらを一つも見逃さずに見渡せたら、そこは、遠い空の奥に届いているに違いない。私

はもうそれを見上げられはしないが、それは何処かに私の透き通った姿の痕でも見付けているのかも知れない。その痕は、必ずそれを見付けたものに似ていなければならない。そうでなければ見付けられてもいないだろう。それらをそのような事とも知らずに眺めている草花は、そのような事によって、あるかないかの地面の上に思う様その姿を伸び広げ、風に抗ってもいられる。いや抗わなければならない風などない。素通りさえしていない。先ず風の方が、透き通ったままにただ自らのためのように絶えず姿を変えるものに抗えようもない。しかし却ってそれで草花は、そこにただそれだけであるしかなく、それはもう透き通っているも同じ、色も形もないも同じで、その姿は、遠い空の奥を映して、独りそれと似ていなければならない事に係り切りのようではないか。そうして草花も、その姿のままに遠い空へ溶けて消えたも同じになれば、崩れて消えた筈の地面の崩れた形が自ずから剥き出され、それは花の色でも遠い色でもなく、崩れた形のままの色で、その色と形は固く結び付いて地面の姿を少しも変えないので、そこへは風は幾らでも吹き込んで、風の奥の妙な形はどれも、地面の硬い色と形に打ち砕かれる。しかしそうして風が壊れてしまって、遠い空など何処に見出せよう。地面の色がじっと一所を見詰める形であったところで、その見詰められる一所は、崩れて行く地面の果てしない何処かを彷徨うしかない。しかしそこを乾いた日差しが散り乱れれば、遠い空の奥とは違った遣

り方で、ただ自らのためのように絶えず姿を変えて、そこは透き通って行くようで、這うようにゆっくり起こる風の緩い弧に引き延ばされる声は、その色の形を何処か別の遠い形と、（二〇一三年七月五日）

（割れた楕円の…）

割れた楕円の分厚いものとは分かるが、二つと同じ形はない。それらは輪になって並んでいなければならない。輪の囲む中は、青い枝葉が投げ重ねられ、切り取られたばかりの切り口を溢れる樹液の匂いが行き場を探している。それが輪の外へ出られずに、ただ捩れて重い頭を垂れるようにしていれば、輪は今の処は効いている。割れた楕円の形の一つ一つには、踊り疲れて眠り扱け或いはもうそのまま凍え死んでいるかも知れない体が、折り畳まれているに違いない。そこにしか隠せる所はない。割れた楕円の形も、光りが当たっている筈なのに何処からも光りが当たらずに影ばかりに見せる形で、そのようにその形を隠そうとしている。同じ形のないのは、それぞれ違った向きから光りが当てられているからに違いなく、光りもまたそうして、形を暴こうとしているらしい。しかし折り畳まれた体は先程からずっと、輪の外、輪から幾らか離れた所に、

剥き出しで投げ出されているではないか。その全身の鋭い震えから、力を振り絞って自らで体を折り畳んでいるのは明らかで、その体を嵌め込んだ見えない穴と戦ってでもいるらしい。いや、その緊い穴はしっかり見えている。穴の周りを全く透き通らせて。しかし力尽きたのか、穴の中の体が戦うのを已めると、穴は消える。いや閉じた穴でなくなっただけで、それは穴と同じ幅の透き通った通路になって、ぼんやりとでも明るさの望めそうな少し高い方を目指して曲がって行く。体は折り畳むのを已め、螺子のように捻りながら細く長い腕と脚と胴を伸ばし、通路へ突き刺さるまま流れて行くように進む。ただそうして指先から爪先まですっかり伸ばし切れば、それでもう曲がった通路の端から端までを少し超える程に、体はそこに晒されて横たわり、その青ざめた裸はどう見ても目障りで、纏うべき布を決めるために態とそんな風にしているに違いない。透き通るままの通路に馴染むように肌も透き通って、血管や肉や腸までが浮き出ると、体はそのような模様の一枚のつるつるした薄い布でごつごつと覆われていると見える。その色鮮やかな模様がそのまま通路の壁に移り、通路の中の見通しが利かなくなって体の輪郭が段々とぼやけると、押し出されるように体は通路からぼんやり明るい方へ抜け、剥き出しの腸を隠したいかに背を丸めて固まった。そうしてそこで、明るさに促されるように益益丸くなって、その丸さに促されるようにぐるぐる回り出す内に青ざめた肌の色が甦り、ただ裸であ

るだけの血と肉の丸い塊が少し高い辺りに掲げられたようになると、それを許せないかに、そのまた少し高い方から大きな垂直の影が少しずつ沈み込んで明るさをじわじわと吸い取り、もうその裸の塊の輪郭しか分からない。そうなるとそれは丸いどころか、至る所尖って、怒り狂うように歪で、更に複雑に入り組んで行くのを已めない。入り組む程に、その輪郭だけで裸はより裸に剥き出されるようで、覆うべき布が直ぐにも届けられなければ、その裸の輪郭は、有らぬ方へでも暴走し兼ねない。しかし、どうやら入り組むにも限りがあり、輪郭線の何処かの端が、静かに波打ちながら塊の後ろの見えない奥の方へ、こっそり抜けて行くようで、ただその線にしても裸なら、裸の塊を抜けたからには、それが何を裸にする線であるか分からないまま延びて行くのは、そのまま裸の線の暴走とも見えなくはない。勿論それは、裸の塊の奥へ拡がる何かの裸の輪郭だろうが、その奥が底知れない。いやよく見るとその線は、一箇所で止まっている。それも、或いは底知れない底の辺りまでぐるっと一周して来たのか知れないが、裸の塊の直ぐ脇の、沈み込む大きな影の裾の目立たない所で。実際には線はそこで止まっているのではなく、そこに吸い取られ、その吸い取られたものがそこに押し詰められて、小さな砂粒のような形に浮かぶ。その砂粒の在り来たりな輪郭だけは少しも裸ではない。そうして、それでも相変わらず荒れ狂うような輪郭の裸の塊と、その側で裸の輪郭線を吸い取る砂粒とで、その

場は綺麗に収まっているようでもあるが、そうではない。その輪郭線だけを線として照らし出す光りが、沈み込む影を貫いて差し込んでいるに違いない。その複雑に入り組む線だけを隈無く追って、少しも光りがその線から洩れないためには、光りもまた、同じに入り組み続け常に向きを変え続けていて、とはつまり、その光源は絶えず物凄い速さで裸の塊とそこから抜ける線の周りを回り続けていなければならない。速過ぎて追える訳はないが、それは恐ろしく危うい重そうな匂いを振り撒いている。ただ必ずしも恐ろしく危ういばかりでもなく、砂粒の周りでは、その形を優しく包み込んで、底知れない奥深い所から、それを確と守っているようでもある。或いはそれは見せ掛けで、その優しい振りで、砂粒の中へ逃げ込み続けている輪郭線を隙あらば引き摺り出したいか。それを分かって輪郭線は、自らを守るための砂粒の形を求めたとも。しかし光りの匂いの側に立てば、砂粒こそ恐れなければならない筈。その中には、光源の動きから始まる光りの全ての有りようが書き込まれている訳で、それを手繰られては光りに逃げ場はない。勿論逆に、砂粒の中にそれが押し込められているなら巧く行っているとも言えて、光りの匂いと砂粒は、相身互いなのかも知れない。実際砂粒を輝かせる光りだけは全く別で、見たところそれは、砂粒に吸い取られる間際の輪郭線の煌めくのと裸の塊を僅かに照らす高い光りの照り返しとが混ざり合うようで、光りの匂いの元の光りはそれに触れもせず、静か

で動かない。しかし実際は、決してそうではない。裸の塊を僅かでも照らす高い光りなどある筈もなく、輪郭線が煌めくのも逆に砂粒に照らされるせいで、つまりは、砂粒自らが光っているのでしかない。光りの匂いが砂粒を囲んでも寄り付けない訳だ。他に自ら光るものは見当たらず、それならここにある限りのものはどれも、砂粒に照らされてその形を見せている。物凄い速さで飛び回る光源など、砂粒の光りが気紛れに描いた不恰好な幻で、光りの匂いも似たようなもの。砂粒の光りだけが裸の塊の輪郭を照らし出す。いや抑も、血と肉の塊を裸にしているのが砂粒からの光りで、その裸の輪郭を止め処なく入り組ませて引き延ばして引き摺り出して吸い取ってもいる。そう見て取られるのを待っていたかのように、砂粒の光りは消える。それと共に裸の塊の輪郭もそこから延びた輪郭線も消えて、砂粒の輪郭だけが残ると、その同じような小さな輪郭はそれ一つでなく、そこにびっしりと数え切れず敷き詰められていて、その輪郭の砂地を摩るように樹液の匂いが流れ、そこを柔らかい風紋が行き来するようになると、そのあちらこちらに割れた楕円の分厚いものが、静かにゆっくり転がっては砂に浮いたり沈んだりを繰り返す。そのどれにも何処からも光りは当たらず影ばかりを見せるが、それで形を隠すどころか、そのように形を剥き出している。そうして砂に揉まれるように割れた楕円の形が少しずつ歪んで、その中に折り畳まれていた白い体の腕や脚や背中が、ごつごつと影の形から突

き出て、遂には影を破り捨てて全身が露わになると、輪郭だけだった砂粒がその濡れているらしい肌に触れて、白く光ってべっとりと白い体を覆う。白と白とは白過ぎて、薄っすらと灰色の影が汚れのように纏わり付く。そうして彼らはよろよろと砂地に立ち上がり、裸の肌のあちこちに青い枝葉を突き刺して、その刺される痛みを表すかのように踊る。いや果たしてそれは踊りなのか。ただ痛みに全身を鋭く震わせているだけか、或いは枝の切り口の樹液が血に流れ込んで、それが体を引き裂くように、彼らをのたうち回らせているのかも知れない。破り捨てられた影は影もない。その姿を輪郭だけにする光りも来ない。それは恐らくは白のせいで、白を捨てる術もない。白は樹液と分かち難く結ばれているようで、

（二〇一三年七月二十三日）

（石を一つ一つ…）

石を一つ一つ決めた形に切って、決めた順に並べて決めた所に積み上げる。必ずそうしなければならない時に、何処を向いて何のために踊っているか、腕と脚を生木のように撓らせ振り回し。腕と脚を更に柔らかく長く伸ばしたいか、柔らか過ぎて風の奥へ消えた青い枝の淀んだ匂いの明るさに再び触れたいか。

と、触れられたかに石のための時が来る。石のような空っぽの硬くざらりとした拡がりに。時とはそんなものか、などと少しも腑に落ちない。汚れて白っぽい椿円の内面のような見慣れた古臭い形は、そこに何を探しても何も現れて来そうにない。動きや流れも影も痕もなく、何も付け加えられそうにない。ただそれで却って、椿円の奥から、白っぽい内面を突き刺すように一つの声が湧き出すのが際立つ。声は、拡がるに連れ、氷のように薄く冷たく滑らかで、空っぽのざらりとした拡がりを嫌うに違いなく、くねくねと何処かへ出て行きたい形になって、椿円をこちらへ押し戻す。押し戻すだけではどうにもならず、氷のようだった姿も少しずつ汚れ、白っぽくざらざらした蜷局を巻く形の石の塊にも似て来ると、声は、それに抗うように震え、椿円をゆるゆると歪にして、その声の震えと椿円の歪さとが、その僅かな隙間の辺りで重ね合わさるような、そこに聞き取れる小さな静けさは歌ではないか。歌とは聞こえない程に単調な、しかし雑音のように混ざりも揺らぎもしないので、歌には違いない、そんなものがひっそりと歌われ、そこに挿み込まれる。声も椿円もその歌を掻き消したいようだが、それが却って歌を途切れさせないようでもある。歌などと言うあやふやなものは、周りを暗くし、孰れ災いを引き起こす。それが地上に洩れないために、隙間なく石を並べて積み上げなければならないのかも知れない。しかしもう歌のせいで、石を決めた形に切ろうにも、その形にあやふやが

混ざり込んで儘ならない。或いはどの途、歌が邪魔して決まった形の石を並べるのは何処かで巧く行かなくなるなら、歌を耳にしながら、どう石を切って並べるべきか予め考えられる訳で、後の事まで思えば良かった。と言って、石の形と歌の形がどう結び付くか。抑も石など何処にもない。ただ腕と脚を撓らせ振り回しているので何とか恰好は付いているが、腕も脚も、もし氷のように冷たい声に囚われでもしたら、などと考えるのは、もうそうなってしまっているからかも知れず、腕も脚も風のように柔らかく風の奥へ消えたかどうか定かでないが、歌の在処を探り当てたなら、もう役目を終えたか。いやそれならすっかり消えている筈で、腕と脚はそこにキラキラとまでは行かなくても透き通って跳ねるようで、そう見せるのは、脚が踏む砂地が、あちらこちらで僅かに光り輝くからで、脚に踏まれて鳴る砂が波打てば、その形は歌の形と、所所でもぴたりと合わさるではないか。いやそれらしいのは、砂地の中でも暗い辺りばかり、そこへ望みの歌の形を思う様流し込んでいるに過ぎないのでは。或いは、そう出来ているなら先ずはそれで構わないか。砂をなぞれば、流し込まれた歌の形に触れられる筈。ただ脚は踊りを已めず砂は踏まれるばかりで、直ぐにそれは掻き消され変わって行く。そのようであるしかないなら、そのままに何処かへ歌の形を映し出すべきで、そのための斜めの光りがあれば。光りが要るなら吐く、と吐いたのは、光りではなく、汚れて白っぽい湿った土の塊で、肌理

は細かいが踏んでも粘土のようには形を変えてくれない。「火を売り歩いているんだ。」「火と交換しよう。」と歌。「構わないが、火は何処。」すると歌は「闇の中。」「闇なんてない、あっても火の向こう。」「火を置ける闇を拵えるんだ。石を積み上げたような、壊れない。」で、途切れた。それきり歌は石のように黙り込んで、歌と石が喩えで繋がるのは出来過ぎにしても、何処かで石のように横たわっている歌を切り出して並べれば、火を置ける闇を積み上げられそうな気にもなって、つい辺りを探ると、その探しているのが、腕でも脚でもなく火に違いない。何故なら辺りは熱く揺れる光りにゆらゆらと照らされるばかり。ただ火の姿はない、と思うとそれは、砂地の中の一粒の砂に見付かる。その火の姿の砂粒は直ぐに、見付けられて腹を立てるかに丸く何重にも膨らみ、放って置いたら何処も彼処も火の色に染めてしまいそう。しかしそれは一瞬で、膨らみながらも火は、或る決まった形を幾つも組み合わせたような形の中へ、くねくねと流し込まれる。歌の形へに違いない、他に何の形も有り得ない。その形へと火が全て閉ざされると、熱さを増しているのが、その怒り狂うかの色の強さで分かる。歌の形の捩れて薄くて如何にも危なっかしい辺りはもう溶け始め、直ぐ脇の裂け目にどろりと流れ込もうとしている。それを嫌がるように、その裂け目の奥から途切れ途切れの低い声が浮かび、膜のように裂け目を塞ぐ形を取ると、膜の形は歌の形とあっさり馴染んで繋がって、寧ろ火を真っ直ぐ

裂け目の奥へ導いてしまう。そこでは火の色はただ真っ白で、熱いのか冷たいのかも知れないが、裂け目の艶艶した内側を激しく舐めて、その照り返しが裂け目から噴き出すと、その光りは、裂け目の形の入り組むままにか、その向きを出鱈目のように振り回して砂地に射す。そんな光りが今更何。歌の形は、裂け目の奥の声の罠に嵌まったかのよう、裂け目に挟まれ身動きも叶わない。それを耐え難いのは、歌の形より、そこへ閉ざされた火であるのは明らかで、その色は真つ白を突き抜けた薄紫かも知れず、その色が、吐かれたままの土塊の湿って白っぽい上っ面に、ゆっくり渦を描こうとするように伝わると、別の色の光りが、ただ捉えられないだけで強く、土塊の内の奥から、恐らくは火と同じような怒りによって放たれる。そうに違いないと、腕と脚は、その光りの形を浮き立たせる踊り方を探るために撓りたいが、撓るどころか、細長い枯れ枝が石になって、やはり石になってしまった根から伝わる地面の揺れに合わせて震えているようでは。ただそのようであると分かって、それで光りの形は、砂地から少し離れた辺りに描き出される。その形は光りを土塊から吸い取るが僅かで、その形の縁に薄い光りが所所へばり付くのがやっと。土塊の光りが絶えたのでは全くない。土塊から吸い取るより、その光りの形が土塊を包めばどうか。それには腕と脚が妨げで、それは止まって見えるが、縁にへばり付く僅かな光りで照らすと、その微かな震えを滲ませられる。そうして光りの形は、立

ち枯れの枝を覆うように腕と脚を抱き込んで、その震えに添うように形を変えればもう形でもなく、微かな震えを滲ます何処か明るい匂いのようなもの。腕と脚を離れはしないが、どのようにも動き回れる。しかしそれでも土塊までは、もう少しだが届かない。それを待っていたかのように土塊は、どろりと溶けて、もう土塊でもなく、色も分からないただ強い光りの流れる姿になって、歌の形を挟み込む裂け目へと細く小さな滝のように落ちて行き、裂け目を激しく揺さぶると、歌の形があやふやになるのに乗じて、中の火がくねくねと噴き出し、歌の形をすっかり呑み込む。火は真っ白でも薄紫でもなく、恐らくそれと真逆の何処か暗い捉え所のない色で、それで果たして火か。火を薄めて溶かした闇のようでも。そうしてそれは、裂け目から身を剥がし、砂地の方を向いて火の姿の砂粒を探すが見付かる筈もなく、ゆるゆると窄んで沈んで行くしかない。艶艶した内側を覗かせる裂け目が残って、その形の入り組むのは、火が欲しくて歌を待つからに違いない。待って来ないなら自ら歌うべき。裂け目の奥の低い声は、土塊の溶けた強い光りの流れる姿に潰されたか。そこに聞き取れる小さな静けさは歌ではないか。いや歌は、裂け目が火の熱で入り組む形に縁取られるので分かるが、途切れたままの黙り込む姿で、裂け目の深さを測ろうと、縁からその奥底を静かに覗き込んでいて、（二〇一三年八月二十八日）

（何の祭りも…）

何の祭りも、手当たり次第にものが食えれば構わない。しかし他の準備で皆出払って、掛け合いの声や木を打つ音、石が引かれる音が、混じって遠くから響いて来ても、間違いなく食い物の支度が抜けているのは聞き過ごせない。食い物を取りに行かなければならないが何処へ、と考えるから足が止まる、さっさと駆け出そう、といきなり足を取られる。深く柔らかい砂で、その円い少し盛り上がった砂地は狭く、しかも端から乾いた砂は滑り落ちる。風も水もなく、何が砂地を削るか。祭りの準備が、地面を伝って砂を震わすに違いない。掻き集めようとする程に砂は流れ、もう何処が砂地も、掻き集められては擦り抜けて行く砂の流れが、切れたり繋がったりするばかり。その下に剥き出されるのは、ざらざらもつるつるもしていない真っ白な岩肌、微かにざらざらの周りをまさぐればつるつるつる、つるつるの辺りを探ってもざらざら。ただそうしている内に上っ面が僅かでも削られるか、砂とやや違う、もう少し柔らかな粒粒が、砂を逃れるように集まっては、またばらけたり。流れ落ちるのは砂ばかりで、その粒粒の集まりは、丁度つるつるとざらざらの間にこびり付くように固まる。しかし、そのまま一つに盛られて纏まるようで纏まり切れず、乾けば割れた欠

片の姿で岩肌から剥がれ、砂の後を追うように緩い螺旋を描こうと転げ、その内の見失われなかったのは、大きな一つと小さな二つ。三つ揃って動いたので。砂は大方失われ、螺旋の果てに、幾らでも砂を呑み込む口が開いているのを見付けたかどうか定かでないが、それらしい辺りにまで、大きな欠片だけは行き着いて引き返したらしい。或いは、何となく近くで口を開けているらしい穴の方を向くまま、何処へとも流れて行くならそうであるしかない。振り返ると、小さな一欠片は線のように細い枯れた枝に引っ掛かり、もう一つは透き通り掛けた瘤だらけの剥き出しの朽ち掛けた根に引っ掛かっている。しかし木そのものは枯れるどころか、まだ若過ぎてよろよろと撓り、陽も当たらないまま花も咲かせ実も付けている。そう見せ掛けるのか、離れていては確かめようはない。どちらの欠片も元は真っ白な岩肌だったのが嘘のように灰色もかなり汚れて殆ど黒ずんで、花や実の色も匂いも届きそうになく、傾くままに、じっとしても居られず、枝や根に当たっては端から少しずつ削れ、それなら孰れ消えてなくなってしまうのだ、と、大きな欠片は向き直って進む。どうせなら砂を呑んだ口に落ちてその先へ抜けようかと言う、その勢いは、木の花や実の色も匂いも移ったせいでは。口の開くらしい辺りにはしかし穴一つなく、替わりに影のようにぼやけた形の若木が若い匂いを立てて一本よろよろと撓っているばかり。これには花も実もない。大きな欠片がゆっくり周りを回ると、それは欠片の形

を失って、花や実の色と匂いを混ぜて固めて丸くした真っ白な姿。そんなものが側にあっては気懸かりで、若木は萎れてくねくねと地を這うしかない。そうなってみると、真っ白な塊は思いの外、木とは離れていて、白い煙を纏い付かせ、ばらばらに崩れ、その欠片がまた白い煙を滲ませて、遂には白い煙だけになって、煙は萎れた若木より更に低く地を這いたいらしいが、それで何処へ行けるでもなく、地を這う若木を円く取り囲む形に収まると、若木も若い匂いも、すんなりと白い煙を纏って行くが、それは、若木も白い煙になってしまいたいからか、或いは、それに抗おうと煙塗れでも地を這うのを已めたくないからか。何れにしろ、若木のための地面は狭くなるばかり、すっかり白い煙に閉ざされそうになって、若木は木でないかのように震え、纏われた白を振り払い、一瞬その幹も枝も、皮を剥いだ獣の肉のような赤い色に見せて、直ぐにあっさり白に埋もれた。そこはすっかり煙で覆われたのだろうが、風も水もなく少しも動かないので真っ白な硬い地面にも見える。しかし少しずつ白が汚れて行けば、煙は静かにそこへ沈んだに違いなく、そこが白い粉で覆われた剥き出しの地面であるのは明らかか。遅れて来た小さな二つの欠片が、尖って黒ずんだ硬い石の姿でそこを転げれば、地肌は易々と傷付けられ、汚れた白の下の赤味にまで達した傷からは、影のような色の木の芽が幾つか吹くのが覗き、二つの欠片は、その傷の奥の赤味を受けて重そうに黒光りして転がるのを已め、くるくる回っ

てその場に埋まって行く。そうして掘られた二つの小さな穴からは、祭りの時だけの匂いが透けた薄桃色に立ち上り、風がないのでそれは真っ直ぐ細い柱のようだが、流石に見失う程に高くまで伸びれば、ゆらゆらと揺れて、その根元から空高くまで全く同じ濃い色の艶の一筋を伸ばし、隠れていた若木の匂いがそれに蔓のように巻き付くと、そうして溶け合う匂いは、艶の筋を上りながら砕け、刺すような甘さを地面に撒き散らし、それを浴びた赤味の傷の奥の木の芽らは、もうそれと同じ甘い匂いに伸び上がっていて、きっと食べられるに違いないが食べに行ける箸もない。いや白い地面の下を潜って、もうその木の芽の尖った根を舐めていて、その硬い舌触りはぴりぴりと舌を痺れさす。痺れから舌は、獣の肉の赤い色だけを味わい、呑み込む訳にも行かなければ、地に潜ったまま涎に混ぜて垂らすので、白い地肌は、薄ぼんやりとでも少しずつ、赤い色の味が滲んで行く。その赤い味の拡がりを見渡して猛り狂うように、木の芽の根は、尖った形を幾つも継ぎ接ぎして刺々しく延び、地中は、その張り巡らされた根ばかりになって、赤い色の味は何処かへ消えた。その根を舐めても味もない、痺れもしない、ただそれで舌は、入り組んだ根と根の隙間に、柔らかく幾つにも分かれてくねくねと入り込み、刺々しい根よりも余程、根のような姿形になって枝分かれしながら拡がって行く。しかしそれはどうも舌ではない。或いは舌でもあるのかも知れないが、紛れもなく木の根でもあって、見上

げれば、伸び上がって行く幹も枝も高い空へ向かおうとする姿で現れ、若過ぎるまま、花も実も付けたそうに若い匂いを振り撒く音も、鋭く鈍く大小様々に聞き取れる。それは、祭りの準備の響きとはまるで違う、そこに留まり続けて決して何処へも響き出さない、大小問わず硬い殻に包まれた中にじっと詰まってたまま形を変えようとしない音ばかりで、その形は殻に隠されている。殻の形は、若い匂いの形のように捉え所がなく、若い匂いはその音に包まれ守られるように、若木の背より遥か高く空へと上って、自らの重みでそれより上れない所で向きを変え、出来る限り遠くの降りられそうな地面を探す。そうして点のように小さな白い砂地が見付かれば、もうそこへ降りて周りを見渡していて、何処までも白い砂地が続く中に、若木の匂いも走るように流れて拡がり、その下にはもう、砂粒と同じ数程の木の芽が砂に埋もれていても、おかしくはない。風が砂地を撫でれば、砂粒の擦れる音と同じ数の木の芽の膨らむ音が、ざわざわと地中に隠れるように湧いて、埋もれて眠っていた舌を目覚めさせる。数知れない木の芽の膨らむ音の一つ一つに絡み付く小さな舌には、どれも同じ獣の肉の赤い味が乗って、その唾で木の芽が濡れると、それは砂粒を押し退けて風の中へ透き通るように躍り出て、低い姿勢のまま風に逆らうように拗って、砂粒をざりざりと噛み、若過ぎるまま木になって上へ伸びるのを拒みながらも、それでも砂粒をたっぷり銜え込んだまま茎を太くし葉を増やすので、その平べ

った形ばかりに砂地は覆われ、風は砂に触れられず、砂粒の擦れる音も木の芽の膨らむ音も消え、僅かに地下深くの水の流れの響きだけが、殆ど動かずに淀む風の中に溶けて静けさを際立たせている。それでも細く伸びてしまう幹は、透き通ったまま、呑んだ砂を白い粒にして水滴のように吐いて若木の匂いを纏わせながら、真上へ向かう。地面をやっと掴むまま順々に固まった根の下に、赤い味を乗せたままの舌は窮屈な囚われの身で、若木が伸びて花も実も付けてしまうのは、舌がそこで白い粒粒の味を求めて已まないからに違いなく、（二〇二三年九月二十三日）

（私にはさっぱり…）

（落語）
私にはさっぱり分からないが、「人間は一本の葦に過ぎない、しかし考える葦である。」と書いた人がいる。それなら彼は、「葦は一人の人間に過ぎない、しかし考えない人間である。」とも書けた筈。それで黙っている葦ではない。
葦「葦は葦なりに考えているし、人間なんかとは似ても似つかないじゃないかぁ。」パスカル「しかし葦は、葦とは何か、を考えない。」葦「何だその葦を見

下した言い方はある！　葦は葦になる前から葦とは何かしか考えて来なかった。それで今の葦がある。少しでも余所事を考えていたら、この地上に葦の影も形もなかった。こうして葦である事が、葦とは何かの明確な答えだ。葦は葦で居られるための全てを知っている。葦に限らず何だってそうだ。いや人間だけは違うかもな。お前らだけは人間とは何かを考えるのを怠って、気が付けば、何をどう考えれば人間で居られるか見当も付かなくなって、人間は考える葦である、なんて独り善がりの訳の分からない喩えを苦し紛れにひねくり回して、何が何を知っているか、うやむやにしてしまいたいんだ。」パスカル「もし人間だけがそんなものなら人間は独り善がりに考えてしか生きられない。他と違うのはその通りだ。その俺の神に拠ってしか救われない悩みを、葦ごときに分かるか。」葦「そう思うんだったら葦を喩えに使うなよ。」パスカル「その対比に工夫の跡があるだろう。」葦「葦は皆考えるんだから対比になってない。」パスカル「じゃどう書きゃいいんだ。」葦「人間は一本の葦とさえ似ても似つかない程にどうしようもなく人間であって周りを葦や葦と同じように自らの事を全て知っているものに囲まれながら人間だけが暇にかまけて考えが足らずそれを分かりもしないから自らを葦に喩えたりしてしまってはそれで宇宙の中でただ一人で考えている積もりの独り善がりだけが取り柄でそうしていなければ何も知っている気になれずもしそうでなかったらどうしようと気懸かりで他に何

も出来ない。」パスカル「っ長いかも知れない。」葦「悪かったな葦は長くて。」
（二〇一三年十月十二日）

（大きな球のように脹れた…）

大きな球のように脹れたぬるぬるした斜面に恐る恐る立ち、殆ど真下に暗い水の重なり合う動きをじっと覗き込んでいる。平らだったら、どう踏ん張っても、ゆるゆると滑って水に入ってしまう筈で、脹らみだけが頼りだが、脹らみのせいで斜面は急に下へ向かうので、僅かでも前へは出られない。下がろうにも、後ろはもっとぬるぬるしている。しかし下がれないのは、斜面の脹らみに遮られて、水が見えなくなってしまいそうだから。踏ん張っていられるのは、偏に水を見詰めていられるからで、目が水から離れれば、足場がどうでも、身は宙に投げ出されるに違いない。望んで導かれるように、そんなここへ来た。前へも後ろへも行けない。左右には何もない。深い水の姿とだけ向き合いたかったのではない。深い水が直ぐ先に続くのは分かっていたが、水の動きとそれを映す目が身を支えようとは思いも寄らなかった。望んだのは、そこからどちらへも動けない斜面の脹らみの一点を見付け、そこに立って、そこからの眺め

の中に、まだ見た事のない色を見付け出す事だったろうか。何のために。などと考えるせいで、水から目を切ってしまったのに、身はビクともしない。改めて目を落とすと、水は跡形もなく、斜面と比べれば途轍もなく広広とした乾いた窪みが円い口を裂くように開け、風の音さえ聞こえて来そうに奥へ行く程拡がって何処までも降りて行く。その底の暗がりを覗いてしまった目で見直すと、斜面は、ぬるぬるどころか酷くざらざらしていて、踏み出しても後退っても足の裏を傷付けてしまいそうだが、水もないし、そんな斜面を見詰めていても仕方ない。息継ぎでもするように喉を捩って見上げると、暗い地上と切り離されたような青い空は鏡のように虚ろでつるつるで、その空一面隅々まで、斜面の下の乾いた窪みが逆さに映って、直に見下ろしては見えなかった更に奥深くが、空を重く突き上がり突き抜けるように拡がって、空が一枚の半球の鏡なら、その重みに耐えられず今にもそれは割れそうで、そうなればそれに遮られていた、地上にまでちゃんと明るさを降ろす広い空が高く晴れやかにでも現れてくれるだろうか。しかし空が割れる筈もなく、窪みの奥深くの星のように高い一箇所に目が留まると、そこは斜めに走る歪な小さな治り掛けの傷口のようで、少なくともそこだけは、決して逆さではない。何故なら、窪みは全体下から上へ突き上がるのに、そこだけ上から下へ突き刺す傷のようなので。すると窪み全体も、決して鏡のような空に映ったものでなく、空を退けて空より高く深い、何

処までも地肌を削り抉って行く実際の拡がりに間違いない。であるならそれが逆に、脹れた斜面の下の暗い水の動いていた所に映っているか。ひょっとして変わらずそこには水があり、その動きが止まったせいで、鏡のように真上の地下を抉る景色を映しているのかも知れない。しかし目は、掴み取られ引き摺り回されるように真後ろを振り向かされて、窪みの奥深くの高い一箇所の傷口の形そっくりの、割れた鏡の尖った小さな欠片を見詰めさせられる。それは斜めを向いてぐるりと捩れ、小さくても、果てのなさそうな窪みの奥の奥までを隈無く映しているに違いない。汚れた灰の積もったような柔らかそうな地面に突き刺さり、露を滴らせ、濁った色に濡れる灰の土から、くぐもった、匂いのような声を引き出している。その声がなければ、空を退けて空より高い窪みの拡がりは、呆気なく砕けて雲のように消えてしまうだろうか。いやその声だけでは何ともならない。声を聞いて、鏡の欠片の中の窪み全体の姿が、それに応えて更に露を滴らせていなければならない。しかし何時までもそのままで居られそうにないのは、鏡の欠片が何かに追われているから。追っているのは何だろう。勿論、退けられてしまった空と、動きを止められてしまった水が係わっているに違いない。それはもう地平より上と地平より下の殆ど全てではないか。太刀打ち出来る筈もない。鏡の欠片は、自ら砕け、その欠片が更に粉々に砕け、煙になって風に吹き払われ、それで最後の露を滴らせると、その灰の土に染み

ながら、それに痛みを与え、そこから一度だけ振り絞られる声は、それまで同じに繰り返されたのと全く逆の事を言っていて、それに従って、目に映る景色はそれまでとは逆様になった。それまでが逆様だったのかも知れないが、そうでないのかも知れない。何であれ、それが逆様であるものを突き止める術など、きっとない。新しい景色の何処を探しても、斜面でも空も水も地平線も地面も地下も見当たらず、ただ、分厚く柔らかそうな鏡のこんもりと丸まった塊が一つ、小さな暗がりの上にそっと置かれるようにして、微かな寝息を立てて動かない。或いはそう見えるだけで、もう冷たく死んで横たわっているのではないか。これも、どちらかを突き止める術などない。その丸まった中に、鏡は何を隠しているのだろう。それを知りたいと思わせるためにだけ、それはそんな形をして、鏡になって、手掛かりを探ろうとするこちらの目を撥ね除けているに違いない。実際そこには、その鏡を見詰めるともなく見詰める目と、その後ろの灰色に僅かに血の色を混ぜた薄暗がりしか映っていないではないか。その色は確かにそれまで見た事もない色だが、どうにも見たくもない色でもあって、その色から目を逸らすには、それに囲まれた自らを鏡の中に見詰める目だけを見詰めるしかなく、そうしていると、ただ目が自らを見詰める目だけになってしまって、その中に吸い取られそうだが、少しも吸い取られなどせず、じっとそうして居るしかない。その、そうして居るのは何だろう。目はその目自らだ

けを見詰める事で、何処か多分見えない後ろへでも見失われたしまった。或いは見失われたは言い過ぎで、目の形を捉えられなくなっただけで、見えている全てが目であると考えて何の誤りもなさそうだが、実は全くそれは誤りで、見失われた目に換わって遣って来た別のものを見て取っているのかも知れない。どちらであるかを突き止める術もなければ、遣り過ごすしかない。しかしそうして見て取られたものが、ただそれを見て、じっとそうして居るものであるのは確かで、ただその確かな事だけは確かだが、その他に何も付け加わらないなら、それが何であるかは何も分からない訳で、分からないなら、じっとして居ながらも分かりそうな事を探して辺りをうろうろと彷徨いているも同じ、と思うと、声の消えてしまった方を振り返らずには居られない。勿論、もう消えてしまっているからには、そちらが声の消えてしまった方であるかどうかを突き止める術はない。それは遣り過ごし、見えて来るものが見えて来るまでずっと突き進んで行くしかなく、何処かで、何処まで拡がっているか知れない鏡の一点にコツンと突き当たったようなら、何処にも突き進んでなどいなくて、目の極間近の何も映らない鏡を、ぼんやり眺めるともなく眺めているままだったのでは。そうであるなら、そんな目など直ぐにも何処かに放ってしまいたいと望めばその通りになって、残るのは、何も映さない鏡の何かを隠すように丸まった小さな姿ばかり。どうしてそれをそこに留めて置けるだろう。隠されたもの

は見る見る遠ざかって、隠されたとも知りようもなく、すると、何も映さなかった鏡に何も映さない鏡が映って、それはそこが、何処まで拡がっているか知れない鏡の確かな一点であると突き止めたに違いなく、それより他に何も見付からないなら、そこにじっとして居るしかない。その一点に映る何も映さない鏡を抱き留めるようにでもして。いやそんな事をすれば、その一点は何処かへ擦り抜けて行くのは明らかで、そう気付いた時にはもう、その映す鏡の拡がりは跡形もなく、何も映さない鏡の塊だけが、その僅かな重みと共に残されて、何故何も映さないそれが鏡であるのかが全く分からず、しかしそれが鏡でないとも突き止める術がないなら、（二〇一三年一二月二十五日）

断片　二〇一三

著者　u_

© 2013 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published